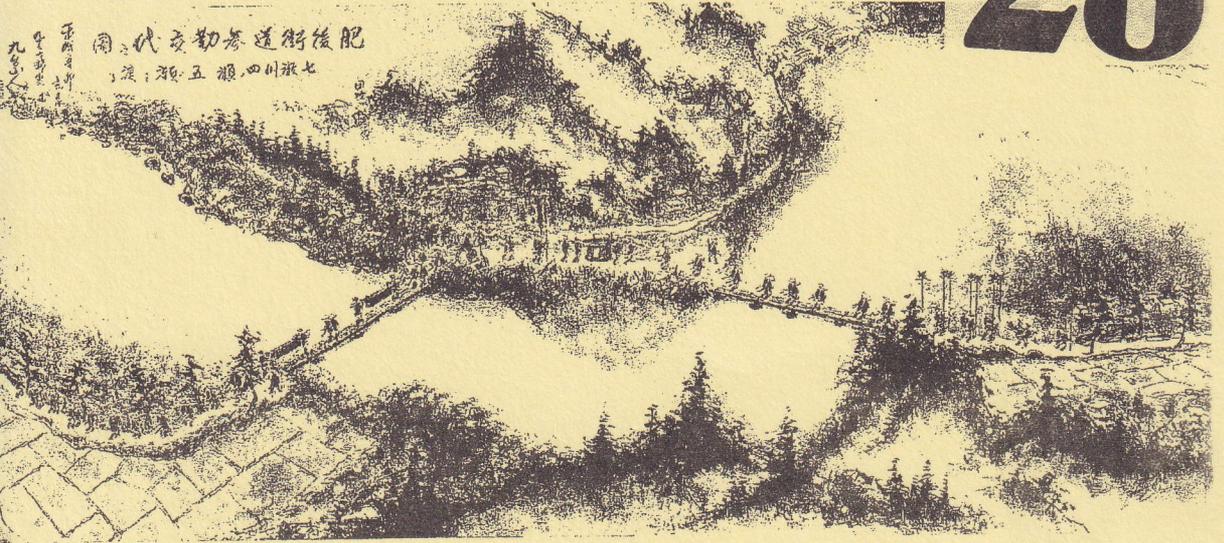


# 野津原方言集

# 25



肥後街道 四ノ瀬を渡る

平成二十三年

横一三五

縦五三三

野津原方言集 No. 25号《通算35号》

表紙……………酒井治郎  
題字……………姫野順子

★ ご協力いただいた皆様

加藤正人、染矢多賀男、小野肇、井の下キヨ、安田ハルエ、  
三ヶ尻ムツ、赤星利男、橋本小次郎、工藤ヒサコ、首藤チエ、  
久多良木フジ子、小野正己、川西哲生、橋本寛治、岡本政雄、  
後藤悟、一の瀬豊、甲斐英行、利光節子、佐藤吉晴。  
波多野テル子、小野雄司、斎藤キミエ。

★ 使わせていただいた資料 文献

野津原歴史記録会資料、肥後街道物語、文化財調査こぼれ話、  
月の唄資料、宇曾山物語、野津原村報、野津原読み語り資料、  
地産地消健康づくり、文化協会放送資料、戦後歴史記資料。  
野津原の唄から。

調査スタッフ《収拾調査、編集、印刷、製本、発送》

小野寿祐、佐藤源治。那須政子、赤星ヨシミ。

監修…小野寿祐、赤星ヨシミ。カット広報…那須政子。

製本支援…支援グループ。構成プリンター…佐藤源治。

平成29年10月吉日

野津原方言調査会 大分市大字竹矢

会長 小野寿祐

☎ 097-588-0572

表紙の作者は 野津原方言集の 素直な取り組みに熱意を示されて 発足以来常に影から 応援して頂きました。水墨画にも昭和54年6月から 大分同好会の 佐藤芝効先生に師事。

県内は勿論 故郷愛媛や 上海、など海外などでの評価も高く 優しく真面目な性格は 多くの人たちにも愛され 現在も活動を続けられています。平成9年には 大分合同新聞社賞受賞。々10年には 産経新聞アート展特選受賞。々11年7月に 全九州水墨画展郵政大臣賞受賞。平成13年第6回九州水墨画展 総理大臣賞受賞。々16年の第19回国民文化祭では 実行委員会賞受賞なども。

定期的な開催の 個展などにお邪魔すると 案内して頂き笑顔で記念写真にも 同じ3月20日生まれの奇縁も 心通い合うような 気持ちが遠慮なく話しかけられて 親近感が大きな喜びにも変わります。以前故郷四国の霊場を 全て書きたいと希望と夢を ふくらませていましたが 多忙さがこれを許さないのか でも無心に筆を動かす横顔には まだまだ若さが漲って 参考にもなります。

どうかいつまでも お元気で見守ってくださいます。今年98歳になられました。酒井先生です。

みだし……………	1	宝の玉手箱	
表紙画作者紹介……………	2	大分市に合併までの…	4 1
目次……………	3	野津原は第二の故郷…	4 3
はじめに……………	4	里の踊り唄……………	4 5
		手まり唄……………	4 6
あげな話こげな話		竹刀おどり……………	4 7
高崎山の煙り……………	5	ほうちよぬべぬべ…	4 8
ヤセウマ物語……………	6	宇曾山物語《5》	
50年前の夏作業……………	7	宇曾の大根づけ……………	4 9
50年前の世相……………	8	修験場えの道……………	5 0
方言説明……………	9	馬子唄ばやし……………	5 2
方言漫才……………	10	巡る時代の波と共に…	5 3
方言説明……………	11	方言説明……………	5 5
戦後もう70年……………	12	雪の夜の子守唄……………	5 6
子ども方言世界		五助の馬子唄……………	5 7
犬と猫なし喧嘩……………	13	心こめた……………	5 8
優しい天使の里姫	15	宇曾講の巡り会い……………	6 0
玉葱づくり上手……………	17	宇曾の神の巡り会い…	6 3
民話、伝承		方言説明……………	6 5
六地藏……………	19	リレー続く宇曾の唄…	6 6
今市おばね街道……………	21	方言単語『て』⇨ナ…	6 7
方言説明……………	23	女性の底力	
鳥に取られた餅……………	24	里を花で美しく……………	7 7
方言単語ひろがり		だてに年は取らぬ……………	7 9
『つ』⇨ト……………	25	方言説明……………	8 1
故郷の味		鹿子ゆりのように……………	8 2
地産地消の味……………	35	踊り伝える意地……………	8 3
方言説明……………	39	方言説明……………	8 4
食材あれこれ……………	40	つづく……………	

ちよつと一服

昭和46年☐48年代…85

教えてほしいあん事…87

方言説明…89

昭和48年の回想…90

故郷の唄

山村暮らし、石清水…91

領地の民、授賞…92

方言単語のひろがり

『と』☐オ…93

あとがき…99

伝言板…100

はじめに

今回も素人集団の手づくり方言集 No.25号が出来ました。すべて手づくりのお粗末な冊子でも皆様にはご支援のご愛読を厚くお礼申し上げます。

今だから残せると平成4年に発足 25年が過ぎましたが当初はチッタヨダキカッタゴタルガ本格的になると

さすがと思うように余暇をフル活用して絶対継続を目標にしてご愛読の皆様にと25周年を記念して年2回発行に取り組むことに致しました。あくまでも『方言集の特質』で違反内容もありますがご了承ください。今だから残せるとめぐりあった調査取り組みに感謝しています。

今回は特に過去50年前、47、46、44年前にも陽を当て大分市合併前なども入りました。シリーズ『宇曾山物語』五助の街道には連レノウタ娘さんとのあれこれな話題もチリバメて賑わった往時を忍び野津原の東の顔の宇曾山の600メートル地点まで上りました。スカイタワーとほぼ同じ高さの本殿は後60メートル。『奥の院本殿』に到着となります。

ご笑覧の程をお願い申し上げます。そしていつまでもお元気にお越しもお祈り申しています。



五助の

あやうい話  
あやうい話



△△△△△ あげんこげなはなし △△△△△

高崎山んほうじ煙りが あがりよるんが見ゆる。『何じゃろうかのや』『ありゃーおまい 猿が落ち葉に火を つけたき燃えよるんじゃわい』まさかじゃが そげな頓知が咄嗟に出るんな日ごろかる頭ん 回転がいいんじゃなからうか。頭ん回転がいい脳は どつかる買うち来たんか 昔しゃ大道じ売る店が あったち聞いた事があつたが……。

盆にヤセウマを炊いち 仏様に供えるが 神様が横かる見ち 食べてそうな素振りうしよつた。『ちっと食べちみるな』 仏様がさいで一たら 『きな粉がちーちよるき セキコムト悪いき 遠慮しゅう』ち 断わつたそうな。じゃきそれかるは 神様にや 遠慮するんと。じゃけんど供えるに あんまり差別じゃち やっぱ炊いた時にゃ両方に 供えんとなえ ご加護しちくれんと それも困るが 『そげん心配はねえで 仏様は慈悲深えき チャンとさいで一ちくるるわな。

ヤセウマは盆の大事な 供え物ん一つじゃが こげな話もあるんで。ヤセウマは乾くと 固うなるき盆帰りん 仏様がお供え物をサグルに これじくびると シャント締まるき 便利がいいそうな。土産が多い時どま カカエチ帰るにゃ オオゴトじゃきクビッチ下げるが ヤセウマじ縛ると 丈夫に縛られるき ほらもう便利がいいそうな。

そげー長うは作りきらんえ 豊後んシドマァ ダンゴ汁炊く時どま 伸ばしち割いち 鍋に入るる手裁きが 独特に伝わちよるんで。コンメー時かる オカチャン ハバサンが炊くぬ見ち 覚えたき子どもん時かる もう覚えち忙しい時どま しゃんしゃん シャントコペーに焚きよる。見よう見まねた ユウ言うたもんじゃなァ。

真夏ん暑いマッサカリ 辻ん地藏様ん前じ ヨコイヨル若え時  
かるん仲良し。『元気かえ 今日も暑いなえ』『じゃなゝ夏じゃ  
き チッタァ暑いわな それでん あん頃かる暑いに ハリコミ  
ヨッタキ今でん サカシインデ』『ふんと そうじゃなゝ』 話  
しゃ50年はず前に サカトンボリした。

嫁に来たばかりん頃 働き蜂じやっち思うが 盆前どまもう  
寝る暇も ねえごたった。盆まじ区切りうせんと 笑わるるきち  
それこす ソレジノウデン 夜明けゝ早えにもう 起けち飯焚き  
そんなかめー 婿じょうわ草きり行く。麦飯が出来た頃にゃ 草  
切りかる帰った婿じょうも 朝露に濡れたまんま 板の間にズリ  
アガッチ ムギメシ 味噌汁 キユウリン酢和え 簡単な朝ん食  
事が サラリト始まる。

昼間にや畑ん芋ん草取り 昼寝チョコットシヨル間に 小昼ん  
火焼きが鍋じジリジリット。出来たきチョイト 横になるともう  
男たち馬や牛を引いち 草きりに出ち行く。女子したち田の  
草取り。畑は燃ゆるごつ暑いき こんだ水んなかじ 腰うかがめ  
ち 田の中をハイマワル。

トキドキ牛アブが 汗ん匂いに誘われち 背中にチクリ『コン  
ヤター』ち 泥んち一た手じ叩く すぐ飛んじにぐる悔しさ。後  
が痒いき泥手じ 掻き回すがモウ後んまつり。水ん中じゃきチッ  
タいいが 背中にアブよけん セメント袋があるき 汗がたまる  
。物言う元気もノウナル ごたるがココジ負けちたまるか 晩方  
まじハリコム。

年寄りシヤそれなりん 墓に立つる花筒、物干し竿切り 干し  
草がツボいっぱいにあるぬ ひっくりかやす。家族が分担したが  
ちっと 影べらになる頃にゃ もう帰らにゃ干した 干し草を束  
ねち『マヤンツシ』いあげち冬ん餌にする。



長え昼間がヤンガチ暗うなる 夕飯ジャ決まっち『ダンゴ汁』  
あり合わせん 食財が旬の味を食わるる。手っ取り早く出来ち  
イリコだし 手作りの味噌 鮮度の高い野菜なんか 栄養源に  
なっちよるし 腹持ちイイシ内緒じゃが 米ん食い延ばしにも  
なるき農家ん 経済管理にも大けな 響きもあつた。

田畑ん草取りが済むと 馬牛小屋の肥出しにかかる。たまつた  
肥やしは農作物生産にゃ 欠かせない大きな役割。ツボ先に積み  
あぐるとすぐ 発酵しち独特な匂いと 蒸気が立ちのぼるが こ  
ん煙りが盆前ん仕事くぎり。『えーと済んだかなあ』 顔見合わ  
せち無事 みんな元気じここまじ 来たぬ喜クウダ。

もう意識不明になるぐれ ダッチシモウタンが ちょろり寝た  
ち思うたらコチョコチョ 何か無心が始まつたごたる。ダッチシ  
モウタち そんな瞬間でん請われるんなら……これも勤めかち 心  
ん中じゃ不満も ねえ訳じゃねえが 叶わせる心くばりも 大事  
かん知れん。相手もそれなりん。

手がスベスベシヨル 若い娘たちでん 肥だしした時にゃ手が  
人の もんのごつすべすべしちよる。盆踊り前どま『肥だししち  
よきゃのう』ち ゆう言われたもんじゃつた。滑りがいいき 物  
ごたートントンと 終わると夢は のぞかに楽しい世界に。明日  
も暑いんか いつまでん眠れん蝉が 騒がしい。

ばかり食い それも平気じ慣れた。あげな日が続いた 夏で  
んまあ病気もせんじ ねえふんともう。いつんなかめーかもう  
80になっちよる。『じゃなあ ソリシテンあんた 元気がいい  
やっぱ いい婿じょうじゃつたき そうじゃなあ』『……』  
返事のねえんは よかつた証じゃろうなあ。

思い出してん『ふんと頑張つた』ち 思うのん健康  
じゃつたきじゃろう。まさに幸せん原点かなあ。

こりゃー今かる50年前 昭和42年《1967》頃んこと  
そんな時ん総理大臣が 佐藤内閣じ米価が1俵⇒8208円じゃ  
った。ちっと前ん39年に 新潟大地震があっち 44年にゃ  
自主流通米が 8218円に。それが45年になると 減反の  
奨励に入った時代。1俵増産な夢んごつ 変貌しちしもうた。

瑞穂の国じゃった 日本が人口も増えたに 米ん増産が逆に  
減反の憂き目に さらさるるなんか ちょいと考えられん事態  
になった。おまけに機械化が進んじ 農機具が農家全般に 広  
がる有様が設備投資に 金が掛かって利用価値も 少ない期間  
利用に資金が つぎ込まれて収支の バランスにも不安が。

田の中をハイズリ回りよった 光景ももう珍しいごつなる。  
機械化は農閑期にゃ倉庫じ眠り 米価はそんなわりにゃ高うなら  
んき 根づけしたら自然と 出稼ぎに傾く有様になった。農業  
経営が外国に頼るごつなると 一層そんなバランスが 経営には  
苦痛になっち ジイサン、バアサン、カアチャン産業になった  
。

収入を求めち働きに出る それもあればん話しじ 遠方まじ  
マイクロじ行くごちなりゃ 帰り道じ買い物しち 銭ん回りが  
ちっとゆうなりゃ じねんと腹も太うなっち 生活環境まじ  
変わっち来た。鍵っ子があったり 親が帰りが遅いなんか 心  
の豊かさがチットズツ 変わる社会になり始めたごたる。

39年に新幹線が開通 東京オリンピック開催と 近代化ん  
波にのった生活環境も ちっとずつ贅沢傾向に 様変わりする  
社会が見られるごつなっち 泰平ムード、裏を返すと農山村は  
経済ん ひずみに押し込まれるごたる。機械が人間の仕事つし  
ちくるる そんな分な銭がガイトいる そげな理屈が罷り通る。  
全てん物が上がったわりにゃ 米ん値段な上がらんじ 減反の  
割り当てもイミッチクル。



## 方言単語説明

- 5 P 燃えよるんじゃわい…燃えていると思います。どっかる…どこから。食べちみるな…食べて試す。ちーちよるき…ついているから。セキコムキ…急に咳をするので。じゃき…ですから。じゃけんど…ですけれど。サグル…さげる。シドマ…人たちは。オカチャン…お母さん。しゃんしゃん…張り切って元気よく。シャントコベー…しっかりした者。
- 6 P ヨコイヨル…休んでいる。じゃなゝ…ですね。チタァ…少しは。ハリコミヨッタ…熱心に精出す。サカシインデ…元気で健康です。サカトンボリ…逆さまに。ソレジノウデン…それだけでなくとも。サラリト…簡単に。チョコットシヨル…少ししている。チョイト…束の間。コンヤタァ…この人は。ノウナル…なくなる。シャ…人たちは。ツボ…農家の広い場所。ひっくりかやす…さかさまにして倒す。マヤンツシ…小屋の二階。無心…なにか言いたい。
- 7 P ヤンガチ…やがて。じゃ…では。喜こんだ。ダッチシモウタ疲れてしまった。トントント…順調に。せんじ…しなくて。じゃなりリシテン…そのままにしておいて。
- 8 P こりゃ…これは。自主流通米…自由に売られる米。減反…計画的に植え付けの制限。根づけ…植え付けした。出稼ぎ…暇を利用して働きにでる季節労務。ちっとゆうなりゃ…少しでもよくなれば。じねんと…自然に。腹も太った…裕福になって。チットズツ…少しずつ。イミッチクル…増えてくる。

日頃かる面白いこつ 言う二人が村ん辻じ出合うた。『ヤゼン  
な チャント クルち言いヨッタキ 待つチョラニャち 思うチ  
ョタニ アタデ センチンに 行きトナッタキ 外に出たら ツ  
カエチヨル。エート エータキ イッタラ コンダ 出リヤセン  
。いきとうなってん スグニャ無理ち 思うち ケバッタケンド  
ヘノジョウ出チ ドンコンナラン。

ツーテンカオー 言うトキヤ スグデン出タンカ シレンガ  
テーゲーニャ 出レヤチ 言い聞かせちみた。ジャキ タマガ  
ルゴツデタイイガ オオゲナシガ ツレノウチ 出タキモウ  
テレットシチョルト キリガネエ ノウナルカンシレン。イイ  
グレデタラ チョンギッタ モンジャキ ダンゴンやまが ソ  
コニヘンヌ 占領シチシモウタ。

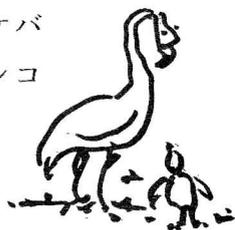
ケンドアター コケラモチン イイノナンノ バリキガ出ソ  
ウジ トドメン オホケナヘガ ぶート ほらがいを フイタ  
ゴタッタ。

ジット見ヨッタ トナリン ジイサンガ 孫が ナニション  
チ ダマシ言うモンジャキ ユウミヨヤ 目ヲ シャント ム  
イチミラニャ ミレンド。ナニヤ ムキスギタキ メンタマ  
オトシタヤ コマッタ コンニャクジャノウ。ハヨウサガサニ  
ャ ヒロウチ クウシガ オルカンシレンド』

ソゲー笑いなんな へそが 移動するで 方言にゃ聞くと  
何か 笑いとうなるごたる 味もあるもんです。ちよいと そ  
ん説明を しましょう。

### 方言説明

ヤゼンナ…昨夜は。チャント…きちんと。クルチ…来るから  
と。ヨッタニ…言っていたのに。待つチョラニャ…待つていな  
いと。チョタニ…待っていたのに。アタデ…急に。センチン…  
便所に。行きとナツタキ…行きたくなかったので。ツカエチョル  
…先着があった。エート…やと。エータキ…あいたので。イ  
ツタラ…入ったら。コンダ…こんどは。でリャセンキ…でない  
ので。いきとうなってん…便意がしてもすぐに行けない。ケバ  
ッタケンド…力んだけれども。屁のじょうが先にでて。ドンコ  
ンナラン…どうにもならないままに。



ツーテンカオー…調子のいいこと言うて。トキァ…時は。スグ  
デン…すぐにも。シレンガ…しれないが。テーゲーニャ…たいが  
いにゃ。デレヤチ…でなさいよと。ジャキ…だから。タマガルゴ  
ツデタイイガ…吃驚するように出た。それはいいが。オオゲナシ  
ガ…いい大人が。ツレノウチデタキ…連れ立っていっぱい出る。

でたきもう…出たものでそれはそれは。テレットシチョルト…  
ぼんやりしていると。キリガネェキ…いつまでも切りがつかん。  
ノウナルカンシレン…なくなってしまうと困る。イイグレデタ  
ラ…いい具合のところで。チョンギッタ…区切ってみた。モンジ  
ャキ…ものですから。ソコラヘンニ…そこら一面に。

シチシモウタ…してしまった。ケンドアター…けれど後はもう  
。コケラモチン…とても気分そう快。イイノナンノ…こげんこと  
もあるんかち。トドメン…最後の幕締め。オオケンヘガ…大き  
な屁が。フィタゴタル…誠に妙なる妙音を。ジットミヨッタ…静  
かに見よったら。トナリン…隣のじいちゃんが。ナニシヨチ…何  
しているの。ダマシユウモンジャキ…急に声をかけたから。ユウ  
ミヨヤ…よくみなさい。シャント…しっかり。ムイチミラニャ…  
開けて見らねば。ミレンド…見えないよ。ナニヤ…なにですか。  
ムキスギタキ…開けすぎたので。メンタマ…目の眼を。オトシタ  
ヤ…落としたのか。こんにゃくじゃのう…困ったときの愛敬言葉。  
ハヨサガサニャ…早く捜さないと鳥に食われる。ヒロウチ…拾  
って。クウシガ…食べる人が。オルカンシレン…いるかも知れな  
いよ。ソゲー…そんなに。

昔の便所《トイレ》は そとにあって少し 目隠ししてあるが  
一人ずつしか行けない。腹具合の悪い時などは 慌てて間にあわ  
ないときは 近くの畑でも山にでも 代用する事もあったが そ  
れも肥料前うち《先に施す》で 許されよった。臨機応変の理論  
が成り立つ農業 経営のあり方かも知れない。

戦後早いもの約70年《1945年から》になります。復員者  
引き上げ者そんほか 近親者を頼った農村にゃ まず食べ物安定  
場所に人間の本能かも。じゃが人数が多くなってん 苦しい戦争  
が負けにしてん 終わった安堵感かる 困窮者を迎え入れちくる  
る そげな崇高な気持ちに なっち来たんじゃろう。

親の里はもとより叔父叔母 兄弟姉妹義理な親戚 全てが何か  
理由つくりゃ 成り立つ時代じゃった。とにかく食べち 寝る場  
がありゃなんとか凌ぎ それかる先んこつー考える。死んだち思  
う気持ちがありゃ なんとかやれんことも なかるうきなあ。ち  
地域ん世話役は奔走しち 皆んなが落ち着くまじん 借りの場所  
に骨折りしよったもんじゃ。

開いた防空壕、裸電灯が一つブラサガッタ 大きな農家ん家に  
食べ時にゃガラガラするごつ 人数が増えち賑やかじゃった。そ  
げな世話になった人たちも 今は分散した場所じきっと 悠々の  
生活じゃち信じています。時折世話になった人たちに そん時ん  
ご恩返しは忘れんごつ これが人間の生き方ち思う。

戦死者ん遺骨が戦後になっち 帰っちくる。真夏ん暑い盛りに  
迎えに出ち 近所んしたちもそん 地区のいりぐちまじ 迎えに  
出ちあぐるお互いの 戦争ん終結ん日じゃった。流るる汗を拭き  
ながら喪服に抱いた 遺骨は戦後だけに意味も異なるごたるが。  
無言の帰宅は戦時中た やっぱちがうけんど せめても遺骨が  
帰っただけでん嬉しいのじゃろう。

送り出した頃はまだ乳飲み子も あどけない幼子も晴れて再会  
は せめても気持ちん整理も ついたんじゃなかるうか。戦争は  
人の殺し合いじあり 一部ん人たちん行政ん取り組みが そげな  
結末になる原因を 作った事にゃ間違いない。二度と戦争はご免  
じある8月15日。





あそび

こ

と

も

んせ

界



## 『なし犬と猫は仲が悪いの』

おばあちゃんば 縁側で裁縫をしています。古くなって仕事で破れた所を まだ使えるので当てぎれをして 縫っているのです。若かった頃は 少しくらい破れても つくろいをして大事に使わないと なかなか買えない暮らしだったのです。それに勿体ないと思う 物を大切に作る気持ちもあったのです。

『なし犬と猫は仲が悪いの』 いきなり言うものですから おばあちゃんも吃驚して 眼鏡ごしに じっと見つめて言いました。『何か気に入くない事があるの』 おばあちゃんは そんな質問をする孫にこんな話をしました。もともとは人間とはいつも一緒にいるから仲がよいのですが こんな事もあったのです。

犬が猫に話しかけました。『木登りを教えてくれないかなー』 『いいよ』 『教えてくれたら泳ぎ方を教えよう』 『ありがとうじゃ今から始めようか』 『まず泳ぎ方を習って 覚えたら教えるから』 猫はそう言うのと川べりに来ました。水が多くて危ないと思ったけど 折角約束した木登りは忘れて 自分の覚えたい泳ぎを先に覚えたかったのです。

怖いほど水が多くて犬について泳ぐと 流されましたがそれだけに早く 泳げるようにもなりました。でも疲れてしまいました。猫はそのまま 『ああ疲れた それにもう暗くなるので今日は帰ろう』 そう言うとさっさと帰ってしまいました。犬は折角泳ぎ方は教えたものの 自分はまだ木登りを習ってないのです。

暗くなりそうですから 仕方なく帰ることにしましたが なにか損をしたような気持ちですごくごと 引き上げて帰りました。心の中では 『まあいいか 明日早くから習えばすぐ覚えるだろう』 残念だったが諦めて家に帰ると 明日の夢を見ながら寝ました。

次の日はあいにくの雨でした。犬小屋から顔を出した犬は猫の姿をみると『今から木登り教えるよ』そう言われるとこんな雨のなかでは 困るのになぁと本当は 声がかからなければよいがと びくびくしながら横目で見送りました。猫はそんな事など気にもせぬよう すまして雨をよけながらどこかに出かけました。

犬はほっとしたような 残念なような気持ちになりました。でも雨がやめば教えてくれる……そう信じて天気を待ちました。そして3日目に晴れた天気です。猫から『木登り教えるよ』と 声がかかるかと待っているが なかなか声がかかりません。仕方なく犬が猫に言いました。『木登りいつ教えてくれる』『なんの事』

猫に言われた犬は まるで頭を太い棒で殴られたような それよりもひどいショックを受けました。『そうでしょう』 約束したんです。木登りを教える代わりに 泳ぎ方を習う事を。そして雨が降った3日間でした。でも約束は約束であり 泳ぎはすでに教えたのです。

おばあちゃんの話はだんだん 熱が入ってきました。真剣聞いていたものですから もうせりかからんばかりの格好です。それだけに次がもう待ちとおしいようです。『あんたしょわねー』 二人は顔見合わせると 『どげーなったち思う』『教えた』 素直に答えたのですが どうやら教えなかったようでした。

『あのなー教えなかったの』 いけない事だけどね。おばあちゃんは『きっと猫は 追いかけられた時に 木登りが出来ると困る』からではないの。たしかにそれは言えるのですが 約束を破るのはどうでしょうね。仲よく教え合う事こそ大切と思うが』 世の中にはこんな事がよくあるが お互いが生活する為には 約束を守り果たす事も大切な 勤めと思います。以来犬と猫は仲が悪いとか でも仲良しもありますから きっと教えたのでしょね。



## 優しい天女の 里娘えの恩返し

ある時ん事じゃつた。どうした間違いジャツタンか 天から娘が舞い降りち来た。全く知らん場所 じゃモンジャキ 困っちしもうたら 里ん娘が気がチーチ 側え寄っち来ると 籠にもっちゃつた 苺をサイデータ。天女は オジイゴタル 思いじゃつたが 顔を見ながら 手をサイデーチ 恐る恐る 口にしたら そん苺ん なんとまゝ 美味しいこと。

嬉しさと心優しい モテナシに 時んタツノン 忘れちシモウタ。イットキしよると 二人ん気持ちも とけおうた ごつなっち話も 弾んじ 美味しい苺は 見るみる へっちシモウタ。里ん娘も ほんとうは 家に持って帰るんジャツタガ コゲー喜ぶ天女ん顔う見ると ソリャモウ 言えんじゃつた。

そげーするなかめ 時間はどんどん 過ぎち 日ぐれになりあたりが うす暗うなりよった。タマガッタ 天女は『しまった大変』 そう言うのと 『又 あいましょう』と 言うのと パットトビタッチ 飛んで行っち しもうた。里ん娘も 惜しい思いじ 急いじ 後追っかけたが もう 雲の中に消ゆるごつ 見えんごつなっち しもうた。

そんウチニ つまづいち そんハズミー足う くじいち血が流れでだした。それでん 里娘は 追いかけち走る。そん姿を天かる じっと見ちよつた 天女は哀れと 思うと持ちよつた大切な 『お守り袋』を サット 落としました。里ん娘は何が落ちたんち 立ち止まると そりゅう受取っち 開けち見たら中に 薬が入ちよつて きっと天女が 『傷の手当てを しなさいと 落としたんじゃち 解ったごたる。

すぐそん薬を 傷口に塗ると あげー痛かったんが すうーと

ゆーなっち えーと笑顔も コボレデータ。それでんまゝ天女  
ん 姿う追いよるごたる 目じジート空を 見すえチョツタ。  
『ドコカル 来たんじゃろうか もイツペン アイタイナァ』  
ミアゲタ空も だんだん暗く なっち西んそらにゃ 星も輝い  
ちよる。

いっときシヨツタラ 傷んイタミモ ユウナッチ 『もう  
ショワネエキ』ち 全身ぬ 動かしちもみた。傷がミルミル  
ナオルト 元気も元に 戻っち おまけに すばらしい美人に  
も なっちよつた。『ありゃー いいがえー うっと』 里娘  
は 嬉しい気持ちで 歌いながら おうちに帰りました。

家に帰って あんまり 嬉しそうにシ Chol そんな姿に親は  
『どしたんな 気持ちが悪いがえ』『いんね こげこげで』  
里娘は 天女とん 今日ん巡り合わせを 親に話しましたら  
親もタマガッチ 『何え そげこつう』『そうで 嬉しい』  
親も娘ん 優しい気持ちが 相手ん天女に 伝わった そんな  
お礼に『守り袋を』ち 泣き出しち しまったごたる。

二人の娘は それぞれ 違った環境ん中じ 生まれ育ったが  
相手に 対する優しい 心くばりは 誰にも通じ合うもん。ま  
してや 知らない土地で 親切にされる その行いは 心の底  
まで 温かくもしち くれたからです。別れるのも そんな  
宿命 運命でもあったのです。

いつでも相手に 優しゅうする心 気持ちは 相手を大切に  
する事で 自分も 大事にされる 世の中ん仕組みに なっち  
よるルールなのです。人間も一人じゃ 生きて行けない 大事  
な決まりを ちゃんと 守ったからこそ ご褒美として 守袋  
をもらったのかも 知れませんか。

〈野津原に伝わる民話から〉



『やんな〈おまえは〉また たまねぎ植えよるんか〈うえているの〉ハリコムノウ〈ガンバルナァ〉』 『好きじゃきな』 笑顔じこっち向くと 白い歯がうつくしい。やっぱ たまねぎう食ぶるきか うらやましい。いっとき見ちよつたが 用事に行くんか 『ほんなのう』ち 手を振っち スタコラ出かけた。

じいちゃんが 『たまねぎはのう 馬んくそがゆう 利くき道に落ちたんを 拾うち帰ったら たまねごんグロ〈側〉に やっちょく〈肥やしにして〉と いいのがでくるんど』 素直に聞くと毎朝早う 往還〈広い道路〉にでち ひろうち帰りよった。そりゅう見たしも 『あん子はふんと 感心じゃのう』ち ほめよった。

雨ん朝もひらいに来たが もう誰かが先に集めたんか 一つもねえ〈ない〉 がっかりしち 濡れた姿はムゲネコサレ〈かわいそう〉 でん〈でも〉これも 運命じゃろう 遅れたんは自分が悪い そげ一思うと 元気とりもどしち 朝ごはん食べると学校に行ってきますと 小走りに出て行く。

じっと朝からそげな 姿見ちよった じいちゃんは 『ふんとのう ムゲナコス』ち 涙流しよった。あげえ〈あんなに〉頑張りよったにのう』 誰が先に拾いに行ったんか そげ一思うと 悔しい思いがしち 落ち着かんじゃつた。そげ一しよると〈そうしていると〉 見知らぬ人が 包みうもって 玄関に立っちよる。

見たこともねえし 何事じゃろうか じいちゃんは気が 少し乱れよった。『あの』 細い声じ何か言うもんじゃき いらいらしよった じいちゃんな ダマシ〈急に〉 大けな声じ『あんなにごとかえ 人かたん玄関に入っち』 知らんしが見ると

何事かち怪しまるるで ち言ちゃろうかち思うたら 『あんたかたん 孫さんが毎朝 ウマンクソ ひらいヨルキ感心しよったが 今朝は生憎ん雨降り 通りかかったら まだ拾えるもんじゃき 新聞紙に取っち 持ってきてあげたんじゃが。そこまで聞くと 今にも飛びかからんごたる《怒り気味》 気持ちがイサギユ《あっと思うまに》 きえちしもうた。

『ありゃー そげんことじゃつたんな《そうでしたか》 実は今な恥ずかしいんじゃが あん子が 雨ん中に出かけたら もうだれかがヒロウチ なかったち 話しよんぬ《はなしている》 聞いちもう ムゲノウナッチ 腹がたっち 怒りよったんじゃこと。

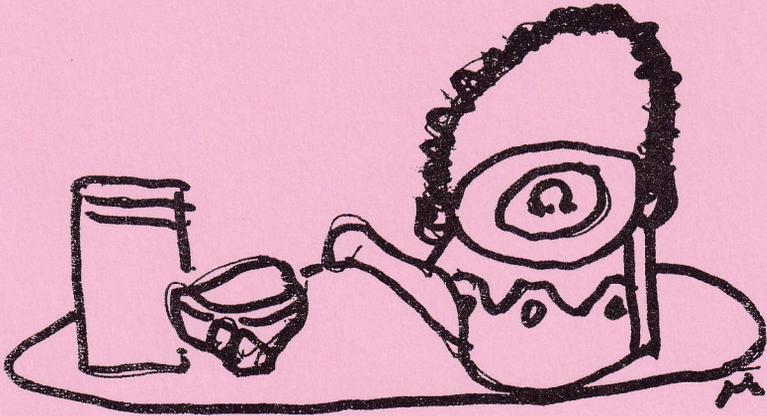
二人は転げ回る《おお騒ぎする》 ごつ 笑いながら そんな親切な人に 最敬礼《一番丁寧なお礼》しちしもうた《しまった》。『あん子が聞いたら どんくれ喜ぶがもう』『あんまり おおげさに言わないでください』『本当におおきに《ありがとう》』じいちゃんの 気持ちは心はもう 嬉しさいっぱいになりました。

夕方学校が引けち《帰った》 戻った孫に 『こうこうした人が おみやげくれたんど』『何じゃろうか』『あけちみりゃいい大好きなもんかん……』 そっとあけた中に なんと馬のくそ。『僕大好き たまねぎにやろう 喜ぶでなえ』『そうとん《そうとも》そうとん』 小走りに駆け出した孫 今頃は たまねぎとどけな話し しようか《しているだろうか》 じいちゃんの日にはもう 浮かんじよつた。

『じいちゃん たまねぎがオオキニ《ありがとう》ち 言うたに』『そうか そげ一聞こえたんか よかったのう』 そんなにゃ大きなタマネギが出来ち あの人の家にも もっち行ったんと。



# 民族 論 傳承



●●● 六地藏 ●●●

天界、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄、これが六道《奈落》にあっち 人間の現世ん生き方う 彼世じ再現さるるち言う。そりゅう救っちくるるんが 地藏菩薩《お地藏様》じ あると言われちよる。古くかる村ん辻やら 幹線の入口に 病気やら不幸かる村人を 守るたみ一立てたち言われる 六地藏がある。

六面に刻まれちよる 仏像は地藏じあり 色彩されたもんやら 八面蔵《上記六道に 天上、地下を含めたもん》 でんある。

こん世を去ると 彼世まじ導いち くるるんは 地藏菩薩じあるき 現世んあいだに 仏像を祀り 行き来に手を合わせ 頭を垂れち ご加護を頼ったんじゃろう。

功德を多くの人に与え 皆んなじ仏道を進むために ち記述された総回向がある。くわしい事ぁ ゆう知らんでん 手を合わせち参る 拜むそれだけでん 純真じありゃ 仏様にゃ通ずるもんこれが お参りん姿でんあろう。

お地藏様は どこにでん 見かけらるる身近い 存在でんあるき それはずまじゃ 奥深う考えんじゃつた そげな人が多いが人は 神や仏にすがる そげな気持ちが 素直でんあるだけに いっそう人んために 救いん手を差し伸べち くるるんかん知れんもの。

何も知らん頑はない 子どもんツブラな眼 そこにもちゃんと拜む 手を合わせる そげな行いが出来るんも ちゃんと神や仏とん 絆が備わっちよるんじゃろう。じゃきイチベ神も仏も 心優しい人は ムゲネエチ思うんじゃ なかろうか。花を供え香を焚き おむすびん一つでん供える時 彼世にゃ気持ちが ちゃんと届いち行く そげな思いもするもんじゃが。

自分だけじゃ勿体ねえち 辻にると通るシドウモ 一緒に手を  
合わせち 参っちくるる。それが素直な心んお参り。赤い前かけ  
を作ったり するんも優しい心ん 現れじこすあろう。おおもと  
赤いのは 衣の代わりち言われるき きっと赤の衣の 寄進があ  
ったこちなりそうじゃ。

そうこうしよると 側にお大師様の お浮動様も祀まれち 辻  
は賑やこうなつた。適当な木陰もでくると 子どもや年寄り  
遊び場になり 野良仕事帰りん ひとよこい場所にもなつちよる。  
ソウカチ思うと 若いしたちん 夜ん寄り合い場所 にもなる  
き お地藏様も お大師さまも お浮動さまも 賑やかなこと。

『折角んお供えじゃき 頂きましょうか』 どの仏様が 言う  
ともねえ言うた 『いいなァ いつも気にかげち』と 両手を  
合掌しち 美味しそくに頂いちよる。まさに天下安楽太平でんあ  
る。子どもが遊びあくち ちっとワヤクスル。そりゅう見た 側  
んバアサンガ 大声じオコッタ。

トコロガそん晩に腹痛 ドシタンジャロウカ お寺に相談した  
ら 拜むと子どもを 叱る姿が浮き出た。『今日子どもを 叱り  
ゃせんじゃつた……』しばらくしち 『じゃつた あん時に地藏  
様に ワヤクスルキ』 『子どもん わやく怒っちゃいけない』  
『悪うございました』 すごすご帰る道すがら ふしぎと腹痛は  
ユウナッコル。

ソレカルハ『元気がせんごつしよや』 笑顔がいいもんじゃ  
き 子どもたちも 元気じ遊ぶ。そしち大きゅなつたら 年寄り  
う大事にしちくるる。お地藏様か ござちよるき やっぱ里は  
いいんじゃろうな。お地藏さんも みんなが幸せなら それがい  
ちばんじゃき。



△△△ 今市おぼね街道 △△△

野津原ん古町に比べち 2里ほず離れた今市が 新しい市ち呼ばるるごつなつたんも 江戸期前に岡領主が 大野川添い交通に変わる 『おぼね街道』が 作られたこちはじまる。川ん氾濫でん こっちに山を辿る街道がありゃ 交通や物資ん 運び通いに至便に そん周辺が開けも する構想からでんあつた。

はじめはいい考えち そん周辺に町並みうち 集まるんを募つたが 高寒地だけあつち 思い通りいかんじゃつた。さんざん考えた挙句に ちつた遠くかるでんち 呼びかけたら それまじ難渋な場所に苦労重ねた そげなしが こぞつて移住する。そげな話になつて 行政も思わぬ歓喜になつた。

じゃが予想以上ん 寒さが問題になつたが それなりん対応じとにかく町筋が 見通し出来た。市たぁもともと 人や物の集散する場所じゃき 注目したんも無理はねえ。大野、竹田、久住、直入、諏訪なんかん 間に挟まれた所じ 水ん便利は悪いが 辛抱すりゃしのげ 集散に事欠かんことが かえつち市ん存在も 高めたごたる。

今市を取り巻く『市』としてん 直入市、五馬市、宇佐四日市、坂の市、野津市、挟間上市、下市、なんかもある。こんほかにも交通ん不便じゃつた頃にゃ もっと多かつたんじゃ あるめ一か。今市ん名前が出ちくる 文書は寛文4年《1664》にち地元ん歴史に 精通しちよるしが話す。きそん頃はもう 今市ち言いよつたな 間違いねえ。

参勤交代制度ん頃にゃ 岡領地ん行列やら 通らせちもらいよつた 肥後領ん行列も 賑やかにこん道が 活気づいちよつた。『おぼね街道』は こげな流れじ 今に続いちよるんじゃなァ。

§ アオよ いさめよ宿場はそこじゃ あれが街道の石だたみ

ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ

ホイホイホイ § §

馬子が荷運び道中じ 唄う馬子歌もこげな 条件の場所じやき  
ゆう似合う。雨に流るる 霜解けがジリー 苦情がでるたんびに  
首っかしげ としち 道に小石う並べち なんとか工面じ 自然と  
いまん石だたみが 出来上がった。それまじ地元んしたちん 苦労  
はおおきかったが 慣れち工面が上手になりゃ 知恵も浮かび さ  
んくりも上手になる。

町並みにゃと通りが多くなっち あれこれん店がひろがる。そげ  
な町筋じゃき よそかるも買い物に 物売りに来る。町はにぎわい  
人ん集まりも多くなっち。石だたみも丈夫な 広い道になっち も  
う雨降りでん 霜んあさでん あんまり苦にならん。草履でんチッ  
ト 隣近所ならそんまま つーじ行く始末。

§ おばねを越えた 今市宿の

竜馬も歩いた 石だたみ

旅の思いで ジャンボイナリに

馬子の唄聞き 出会いたい

若妻の店の 情け味。

こげな山ん中え こげな立派な石だたみ こりゅう保護するたみに  
ゃ 地元んしたちん 苦労は並大抵じゃ なかったろうな。が  
そげか苦労を しゃんと我慢しち 続けた証にゃ 日本中でも珍し  
いごつ 素晴らしい平坦な 場所にある約660Mん 石だたみ。  
これかるも 大事にしち多くん 人たちにも見ちほしいもん。

§ 宇曾に出ようか 荒木に行こうか 四辻峠の思案顔

ハ 七瀬のせせらぎ 小鮎がスイスイ ホイホイホイ §



## 方言説明

- 19 P それはずまじゃ…そのように思うほどまでは。くるるんかん…いただけるものかも。じゃきイチベ…ですからなおさら。
- 20 P あんシドーモ…あのひとたちも。ソウカチ…だからと言って。ドシタンジャロウカ…どうしたのでしょうか。ワヤク…いたずら。ソレカルワ…それから。
- 21 P おばね…山の高い場所をオバネと言う その場所に道を作って 幹線道路にすることで 人や物が通りやすくなる。呼ばるるごつなったんも…呼ばれるようになったのも。こっち…こちら。そげなしが…そんなひとたちが。じゃが…ですが。なんかも…なども。あるめーか…ありますか。
- 22 P ジリー…湿気がたまって通りにくい。泥んこ道に。たんび…たびたびに。さんくり…やりくり。つーじ…飛んで。

- ◎ お地藏さんの前かけ《前たれ》 辻のお地藏さんには よく赤い布の前かけが かけちあるが これはお参りする人が 願いをこめて寄進《差し上げる物》で 多くの願いのために お花、お供え物、水、など すべてがお願いの 意味があります。

前かけもそんな思いで 手縫いが多く心をこめて 縫った物をかけてあげます。冬は寒さよけ 夏は暑さ除けといわれますが もともと仏様の衣の意味。赤は高貴なお坊様の衣の意味からで赤色です。それよって自分の願いが 叶えられなら一番 そう念じて参りするのです。

お参りは心が込められちよれば 一番いいわけで ただあげちよきゃいいじゃ 無意味かも知れませんね。心の問題です。

こげな他にも自分の家にも お祀りしたり自分だけじゃのうじ  
多くの 通る皆さんにも一緒に お参りしてほしいと 辻や路傍  
に立ててあるけど これもできるだけ多くの 人たちに参って  
頂くそげな 願いがこめられちよるんです。人の思いはみんな  
同じようで 同じ場所に並んであるのも 思いはおなじかなち。

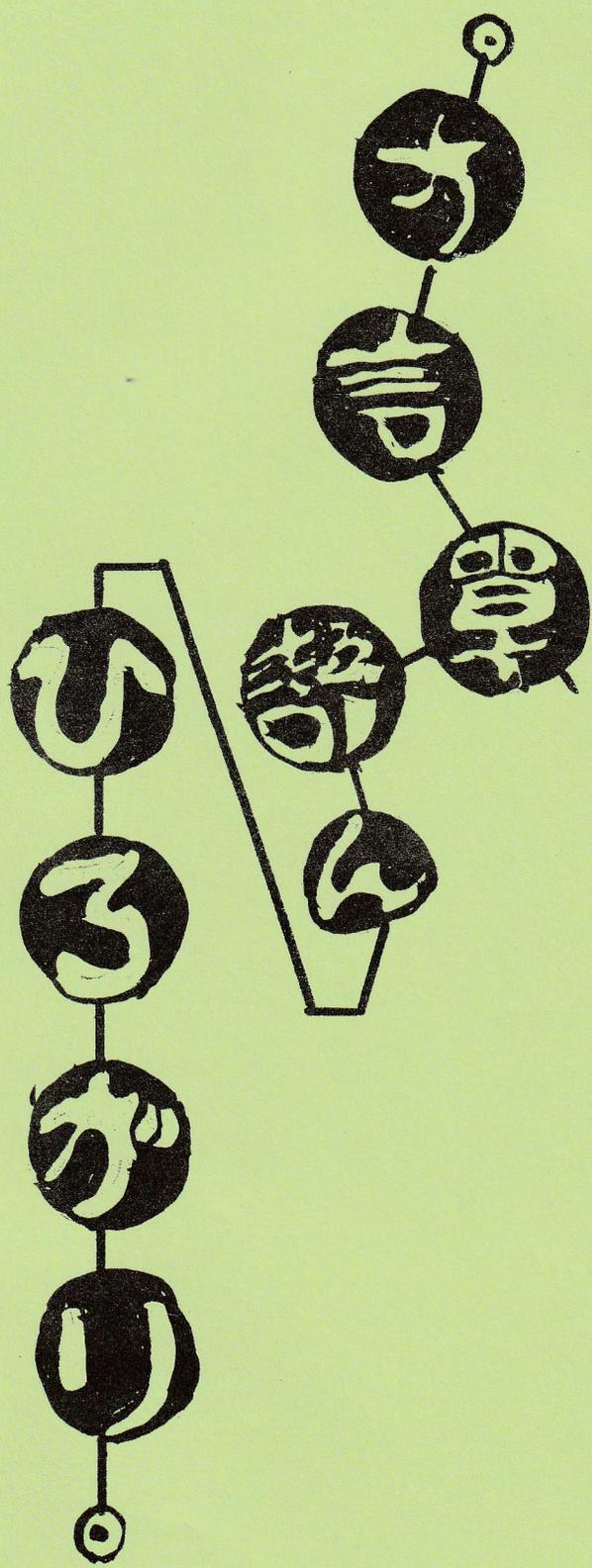
建物の中に入れちよりゃ そりゃいいけど 外じゃやっぱ  
寒い冬やら 暑い夏も来るき こんめ一家でんありゃもう いい  
んじゃが 仏様はそげな贅沢や 文句は一切おっしゃらない。心  
が広く豊かじゃきじ 人間もそげな思いに 考えになると世の中  
もちった ゆうなるんじゃがち 思いますなえ。

一頃は仏様は邪魔じゃち 捨てられる運命ん頃が あっち今も  
欠けたりしたまんまじ 祀られちよるけど 何の苦情も言わず  
に 人間の苦勞や辛さを 聞き届けちくるる。そげなお地藏さま  
は みかけたら大切にする そげな心がけが大切と 思います。  
頼む時だけじのうじ 常日ごろかるん信心が 身を守ってもくれ  
るんじゃ あるまいか。

毎日お花をあげたり 水をかえたりする そげな人たちを見ると  
本当に素晴らしい事と 感謝しますが お地藏様も声こそは  
ださなくてん きっと喜んでいる そげ一思います。なんさまヒ  
モジイキ ヒョイト見たら お地藏さきに餅が 供えちやる。日  
頃はあんまり餅は食べんに そんな日は妙に食べて一き ツマミカ  
ケタラ 鳥が飛んじ来てサット さきにくわえち 飛び去った。

『やっぱ欲う張ったきか』 そき一ウナダレチシモッタ。とこ  
ろがそき一遍路さんが来た。『どうしたんですか』 返事に困っ  
たが正直に話した。『それは可愛いそう お接待に頂いた餅を  
あげましょう』 たじたと引き下がり 『もったいないです』  
と 泣きじゃくったそうです。よう聞く話じゃがなえ。





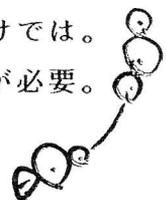
野津原方言調査に取り組んで 25年が過ぎました。多くの心ある皆様に支えられて 今だから残せる大切な 先人たちの生活用語であった 文化財なのです。ご愛読の皆さんが影からいつも励ましてくれ 時折最近は新聞紙上にも 方言のよさが取り上げられて 本当に取り組んでよかったと 感謝し自負もしています。今回も引き続いて 方言分割掲載をこの欄に 取り上げました。ここまでで 計21495語になりました。引き続き『つ』の項『ム』から スタートします。

- つ ツムルンナラ……………つめるようなら、積むのであれば。  
ツムマイー……………積む前に、摘むのなら早めに。  
ツムコタネエ……………摘まないでよいから、積まないほうがよい。  
ツメクウジ……………詰めこんで、隠してしまつので、熟成中で。  
ツメレテン……………積みられても、摘む人があっても。  
ツメテーキ……………冷たいので、冷えすぎて、少し暖めたがよい。  
ツメクジュウ…仕方なく爪印、爪で傷がついて、爪の傷が元で。  
ツメンサキュ…爪の先は美しく、爪は清潔に、爪色は健康印。  
ツメルリヤ…積みられるなら、詰めこんで置く、摘むるなら。  
ツメジホジクル……………爪で耳垢をとる、爪で異物の入ったのを。  
  
ツメコメ……………詰めこんで、無理に押し込んで、無理に入れる。  
ツメタンカ……………積めたのですか、詰めこんだ、閉めたので。  
ツメチョケ……………閉めておく、締め切って、開かないように。  
ツメタナイイガ……………閉めたのはよいが、詰めこんでしまって。  
ツモッテンワリ……………積もると困る、積むと動けない。積に返す。  
ツモリヤコマル……………積もっても困る、つもりは間違いでは。  
ツモウジョケ…ツマム、つまんでおけば、つまむと間に合う。  
ツモウデン……………つまんでも、つまむと間に合う、つまみ道具。  
ツモカチ……………摘む予定で、積み上げるので、散髪の予定。  
ツモケンド……………積むのだが、積むのはよいが、積むなら。  
ツモウチ……………積むように、摘む予定に、散髪の予定で。

つ ツモッタヌ…積もったもので、積もったとは吃驚、蓄えを。  
ツモーダナ…つまんで確認、つまめばわかる、痛ければ。  
ツモッチョリヤ…積もっているなら、蓄えが増えたよう。  
ツヤガユウナル…色気が出て、見かけが美しくて。  
ツヤイイノ…潤いがあるんかも、色気が何とも。  
ツヤンジョウ…上手言うけれど、うっかりその手には。  
ツヤワリー…ちよつと心配な話、用心して、都合悪い。  
ツヤヨリヤココロ…見かけだけでは、見かけより大事な。  
ツヤジャシヤケン…見かけだけでは決められない、感覚か。  
ツヤダケジャ…見かけでは選別が難しい、血統も。

ツユリヤ…壊れるようでは、つぶれてしまうと、頑丈で。  
ツユハライ…御輿の先払い、先導役、人より前に。  
ツユウナッチョル…強くなったよう。頑強、傲慢、自惚れ。  
ツユチュウニ…梅雨時というのに、雨の季節だが。  
ツユーユウテン…強く言うのも考え物、無理強いは損にも。  
ツユコスイイ…梅雨だから都合よい、梅雨なら大丈夫。  
ツユデンウメー…梅雨でも美味しい好物、好き嫌いがある。  
ツユムリヤイテー…強くすれば痛くなる、無理は禁物。  
ツユデンテンキド…梅雨中休、洗たく日和、継子の洗たく。  
ツユシミー…強く閉めて、強く絞めなさい、一人占め。

ツヨユウチョケ…強く言っておくこと、確認して。  
ツヨガリヤ…強がりには奥が浅い、強がりには先が短い。  
ツヨカリヤ…強ければよいものでもない、弱さの得点。  
ツヨガッテン…威張っても知れている、威張ったら損が。  
ツヨデン…強くても優しくない、強くて人情不足では。  
ツヨナリヤ…強いだけが、人の痛みがわからないと。  
ツヨモメ…強く揉んでおくれ、手裁きの技法が。  
ツヨナッチモウ…強くなったが果たして、強いだけでは。  
ツヨヒキャキルル…強く引くと切れそう、手加減が必要。



つ ツラナッチョル……連なっている、並んで来る、行儀よく。  
ツラガマユ……顔が血相かえて、顔が威厳があり、怒り顔。  
ツラニクージ………難い顔に見えて、見ただけでも難い。  
ツラレチ…釣りこまれてつい、調子に乗せられて、油断で。  
ツランカオ………厚かましくて、嫌われ者の損な立場。  
ツラレテン……調子に乗せられても、掛かっていも用心を。  
ツラルルナ……調子に乗せられないように、うっかりして。  
ツランジョー………顔だけで物事は、顔が効くのもどうか。  
ツラニャ………釣らないと、釣りに来たのなら何でも。  
ツリガネーキ………残りの支払いが出来ぬ、釣銭がなくて。

ツリュカキー……釣りをかけて物の整理、吊り下げて乾燥。  
ツリモモウケ……釣銭も積もると大きくなる、一円に泣く。  
ツリクウジ………釣りすぎて失敗、欲張りもほどほどに。  
ツリニャナンナ…連れともだちには考え物、連れ次第では。  
ツリアゲチ……吊り上げてみると、釣るのはよいが結果が。  
ツリグレン…釣りぐらいと簡単には、自惚れもほどほどに。  
ツリャイラン…おつりはいらぬから、残りは無用だから。  
ツルッチスリャ………瞬間の仮眠、気持ちよい程度の仮眠。  
ツルツル………実に磨けて美しい、立派に光って。  
ツルヌミリヨル…釣りをするのを熱心に、釣るより見るが。

ツルットネチ………少し仮眠して、ほんの少しの仮眠が。  
ツルリャセンジ……連れなくて愚痴、釣れないもので空く。  
ツルツルジャ………はげたように、輝くように光っている。  
ツルネキ………釣る側で見物、見るのも楽しみな釣り場。  
ツルベン………釣瓶井戸の、釣瓶井戸の冷たい水。  
ツルット………瞬間の居眠りは気持ちよい、仮眠の楽しさ。  
ツルニャイイキ……釣るには好天気、釣ればなおよいが。  
ツルナンナカ……釣りなさんなど苦言、釣らせてあげて。  
ツルシアギ………失言を皆んなでなじる、意見に反対暴挙。

つ ツルットシチ……急に仮眠から目覚めて、いい所で目覚め。  
ツレテン………連れてても、連れてくれるので、付いて行く。  
ツレタナショワネェカ……連れてたのなら大丈夫、安心も釣る。  
ツレタチワカッチョル………連れてたと確認の魚、場所は安心。  
ツレンツレン…………連れなくて恥じかき、失敗の連続で。  
ツレソウタワルガキ…………連れになった悪坊、悪友達。  
ツレニャヨカロウ………釣れないなら帰る、釣れねば買うか。  
ツレノウチ………連れ立って行く、皆んなで揃って見舞いに。  
ツローミヨ………顔おみればなんと、十人と色が人生だから。  
ツロウアングサネ……顔を横向けて知らぬふり、異質な性格。

ツロウドチ………釣りたいとおもったのに、釣りにきたが。  
ツロウ………釣りましょう、顔お見せて、顔もいろいろある。  
ツワリャ…………女性特有の病気、産前の特殊な状態。  
ツワチュウテン…………つわぶきと言っても、露の一種。  
ツンノメッチ…………転げてあたふたと、急に前転びに。  
ツンツン………腹立ての状態になって、機嫌が背斜めのよう。  
ツンジョケ………積んでおいて、積みましょう、積むことで。  
ツンノウチ………連れなつた人たちが、連れだつて行きます。  
ツンケン………荒たつた言葉使い、暴言交じりのやりとり。  
ツンボ…………耳の不自由な人、難聴で苦勞が多いと思う。  
ツントクル…………急に異臭があつて、異臭に悩まされる。  
ツングリカヤル………急回転して前に回る、身軽な人の動き。

『つ』の項『ン』` 終わり計 2 1 7 2 5 語に 辿りつきました。  
ここまでの多くの方言 それは先人が生活用語として 長い間の  
心の絆でもある 言葉に利用していたのです。一つ一つの言葉に  
は意味のほか お互いが言葉を通じて 『今日もサカシイキな』  
と かけると『サンシュウジ ヨカッタナ ゲンキシチョリヨエ  
フナ』 ト笑顔がこぼれたんじゃ なかろうかなえ。



て テーシタコタネエ…大した事はない、しんばいないでしょう。  
テーゲニヤセント…いい加減にしないと、無理強いが悪い。  
デーブニイチ……だいぶよいから、治ったようだから。  
データ……抱いたから、出したので、はきだした。  
テーゲナコツ…いい加減に、無理な事は、言い過ぎじゃない。  
テーテニ…それぞれ思い思いに、自由をもって、めいめいが。  
テアキヤ…手の空いている人は、ひまな人たちは、何もない。  
テアシユ…手や足をだして、手足を自由にして、ゆったりと。  
テアロウ……荒々しく取り扱う、乱暴な方法で、無理難題を。  
テアタリヤイイ……手の感触はよい、手触りは上等で。

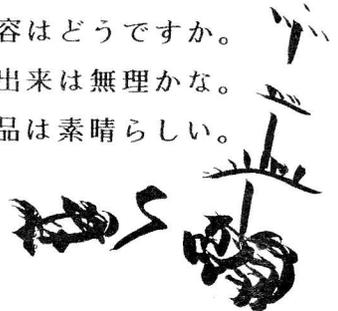
テイテト…めいめいに自由に、思い思いにする、好きなよう。  
テイゲニヤ……たいがいにしないと、自由も程度もので。  
テイタヒラチ……ていとは平地の事、平らな場所場面。  
テウス……人がすくなくて行き届かない、人数が少なくて。  
テエゲニヤ……たいがいにしないと、無理は禁物だから。  
テエチミリヤ……炊いてみれば、炊いた加減はいかが。  
テエゲンコツ……たいがいな事を、いい加減にしないと。  
テエーゲニヤ……たいがいは、いい加減が通らない、中止。  
テエチミリヤ……炊いてみれば、たいたのなら分かるのでは。  
テエタナ…炊いたのなら、炊いてみると善し悪しも、食する。

テエチヤラン……炊いてあげないから、炊かないから勝手に。  
デエラ……たいらな場所、たいらで広い場所、広い場所。  
テエタキ……炊いたのですから、炊いてみたから、試食を。  
テエーチ……炊いてみると、炊いたのはよいが、炊飯試験。  
テエーミ……手で選別する用具、簡単な選別用具。  
デエチヨケ……抱いていなさい、出しておきなさい、出して。  
デエタンカ…抱いたのですか、出しておけば、だせば取りに。  
テオウテ……決断する、まとまったので、話が出来た。

て テオカセ……………てつだって、加勢してほしいが、支援頼む。  
テオカケン……………手がかからずに出来た、手はかけないから。  
テオダス……………加勢して、支援して作る、協力しあうので。  
テオカケチャラン…手をかけてないかに、ちよつかいはない。  
テオイン…傷ついた獣など、負傷した侍たち、負けて逃げる。  
テオキリヤ…これでおしまい、最後の通告だから、決断する。  
テオヘセ……………人数を減らして経費を、節約できる面は。  
テオヨセニヤ……………人数を増やして、陣容を整える、勢揃い。  
テオモ…荷物が重すぎる、負担が大きいので、似合わぬ肩書。  
テオル……………手で折った枝、上品に折ると様になる、手折る技。

テオダシヤ……………勝手に口出し手出し、口を挟んで世話を。  
テオナゴ……………手の効いた達者女、手が効くから人気者。  
テカジ……………手作りのかじ屋、こまやかな技法者、鍛冶の業師。  
テガロー……………手柄を立てて、殊勲輝く、成果が大きくて。  
テカテカ……………輝くまぶしい、光輝いて、磨きあげた仕事。  
テカルジ……………簡単なみやげ、珍しいものを少しが高貴。  
テガキキヤ……………てが効くのは得人、手八丁な人、何でも可能。  
テカゲンジ……………上手な按分が、手配が上手だから。  
テガメチ……………欲張り最高潮、なんでも欲しがる、欲張り人。  
テカギヤヤキタツ……………手鍵は便利な用具、何にでも役立つ。

テガキク……………手が効く器用人、器用貧乏もあるが。  
デキヤワリーガ……………出来が悪くても心が、心が大切ん世間。  
テキビシユ……………厳しいからこそ成果も、苦難が成功の鍵。  
デキシナ……………出来たばかりの、できたのも、出来たそばには。  
デアアキヤ……………出来た季節には、出来る季節はその香りも。  
デキチヨラン……………出来ていないので、出来てないから。  
デキグアイ……………出来た按配はいかが、内容はどうですか。  
デキメーノ……………出来ないだろうが。出来は無理かな。  
デギバヤイイ……………出来は大変良い、完成品は素晴らしい。



て テギリヤ…決着ん証に、あっさりしないと、きちんとすべし。  
テグレイ…仕事が美しい、仕上がりが見事で、見栄えがする。  
テグッチョキャ…手繰っておけば、引き寄せておきなさい。  
テグルト…手繰ってれば、引き寄せて整理、集めて始末。  
テグリヤ…手繰り寄せると、たぐるのも楽しみで、引き寄せ。  
テグミュ…人数が勢揃いする、スタッフが揃った、役者集合。  
テグネチ…束ねて整理、集めたら整理整頓、束ねて仕上がり。  
テグルソベ…引き寄せる側から、ひきよせた側に集まる。  
テグサムユ…手遊びが楽しみな性格、悪遊びに進まぬよう。  
テグリヤイ…引き寄せあう、たぐりよせて成果が期待。

デケメ…出来ないだろう、出来ないと思うが、無理かもね。  
デケント…出来ないと困る、無理かもしれないが、何とか。  
デケガイド…出来あがりが多い、出来が抜群、成果が良い。  
デケシゴツ…出来るだけの仕事で、無理のない程度の成果。  
デケノ…出来たばかりに、できてやっと安心、今完成した。  
デケンサキュ…出来ない先まで、気が早すぎる期待、先見。  
デケンゴツ…出来ないように、無理と分かったが、邪魔は。  
デケモセン…出来ないのに、大ふろしきは歓迎しない。  
デケブリヤ…出来た自惚れは、自慢にはならないが、どうか。  
テゲントウ…手が知っている技法、手が覚えた技術、手秤。

デケリユウチ…出来ると言い張るが、無理は道理の邪魔。  
デケタホズ…出来たほどで、できしこで、無理は禁物。  
デケタンナ…出来ましたか、さすがに逸品、さすがと舌を。  
デケタゴタル…出来たようで、出産しました、おめでた。  
デケチコス…出来たからこそ、さすがにたかわず完成。  
デケンハナ…出来ないうちから、出来ぬ先にほらふきは。  
テゴデンイイ…加勢でもいいので、手助けでも、支援に感謝。  
テゴロン…かっこうな物で、都合よく助かる、地獄に仏。  
テゴンオカギユ…加勢のおかげで、支援が後押し、思わぬ力。

て テゴモドシユ…加勢のお返し、交替の加勢仕事、恩返し奉仕。  
テコブリ…人手が足りずに困っている、加勢がほしいけれど。  
テコギリヤ…手切りの手では時間が、機械仕事は能率が。  
テコボンジ…お盆の代わりに手でご免、手で差し出すお茶。  
テコギユ…小さなコギ落とし機械で、簡単な機械でも間に。  
テゴチン…手間賃の支払い、世話になったお礼の代償。  
テコボリヤ…小さくてこぼれても、こぼれても役立つ小粒。  
テザカノ…もちよりの魚での宴会、手持ちでの会食。  
テザシジャ…持ち出しでは、持ち寄りでもよいのでは。  
テサキガイイ…器用さが取り柄で、手先が効いているので。

テサキュウチ…手先が器用だから便利に、手先仕事はお任せ。  
デサキンミマユ…用足先での見舞い、出かけた先で立ち寄る。  
デザキンミヤギユ…用事で行く先の土産、土産は旅先で。  
テザケンイワイ…持ち寄りの祝い、持参しての会食。  
デサレチコマル…出されたのに土産ももたず、手ぶらの悲運。  
テジカメ…手で我慢して鼻をかむ、しっくい手で鼻を。  
テジアセレ…手を使った干物あせり、干し物を手でかき回す。  
デシヤバンナ…でしゃぼりは恥かく、過ぎたのは笑い者。  
テジャオオゴツ…手では大変だから、方法を考えて。  
テシヨンキモチ…小さな皿の気持ち、無理はいけない。

テジノミヨル…手ですくって飲む、でで汲み取って飲むのも。  
テシオザロ…小さな皿を取って、使い前がよいから利用。  
テジコニイ…側にあるものを上手に、使い分ける技法も。  
テジャアバカン…手には多くてこぼれそう、大盛りになる。  
テスラウ…冗談にあしらう、うまい具合に合わせて進める。  
テズノウ…たずなを、たずなは大事な絆、手綱は命の代わり。  
テスクイ…手で掬い取る、手でくって入れる、手を使った。  
デズンバン…出る幕がないまま、留守番も役者の一人。  
テズマ…手品、奇術、余興に手品は喜ばれる。



て テスグリヤ…手ですぐって使う、手で操作すれば楽、簡単な。  
テズケチカル…………とりあえず内金を、手なずけてから。  
テズッパリ…………出ることの多い人、出番の多くて、千両役者。  
テズメイトルル…手品に見惚れて、物珍しさについてうっかり。  
テゼマ…狭くろしいので恥ずかしい、雑多に物が積み上げて。  
テゼニンミヤゲ…………内緒金で買った土産、心くばりの土産。  
テセリヤヤオネエ…手で操作しての乾燥、時間の割には駄目。  
テゼニンヨリアイ…………小遣いの出しあいで、ささやかな会食。  
テゼマジノウ…………狭いけれど我慢して、狭さをひろく使う。  
デゼグル…………文句が多くて話が進まず、異論が多いので。

テゼマンモウケ…………狭いけれど得な場合も、狭さが取り柄で。  
テゾツチ…………手で上手に集めて、手作業が精密に仕上がる。  
テソバウメー…手打ち蕎麦のおいしさ、心が通えば味も格別。  
テゾリモチ…手で取り上げる餅のうまさ、素朴な味に哀愁が。  
デタナソダチー…発芽したのから大事に、折角の発芽楽しみ。  
デタデタ…………出ましたよ、発芽したので、思い通りの便通。  
テタタキヤ…………手で叩いて具合の確認、標準になれば成果。  
テタタキグレジ…………手で叩いて具合の確認、水加減の難しさ。  
デタナヒツコミ…余分に出たのは害になる、余分は削除する。  
デタトキヤシマツ…………でたのなら処理を、いつも清潔に。

デタラカテヤ…………でたのなら勝たねば、まず一勝すること。  
デタナキオツキ…………出たなら用心して、相手に注意が必要。  
テヂイインカ…………手でよいのですか、手を使う事の大切さ。  
テヂカン…………側にあるので至便、間に合う範囲にあるもの。  
テヂカルミルル…………側で見られる幸せ、便利がよくなって。  
テヂツコウジ…手でつまんで食べる楽しさ、手つかみは快感。  
テヂカキヤ…………手で書くので心がこめられる、情愛も入る。  
テヂツマメ…………手でつまんで食べる、手の触感も旨味の秘訣。  
テヂユウシヨ…………手でよくしなさい、手が大切な役割を。

て テツナビユー……鉄製ん鍋を、鉄鍋んほうがよいから。  
テッチョル……照り出したので、よく笑っているスイカ。  
テッテンワリー……照りすぎても悪い、陽がひどすぎるから。  
テットリバエー……簡単に早く、急いでいる時の急こしらえ。  
テツビンヌ……鉄製の湯沸かしで、お茶の味まで異なるから。  
テッチキタド……照り出したから、干し物には好都合。  
テッチコスヨケレ……天気でこそよい、外仕事が出来るから。  
テッチクリー……天気になってほしいが、雨には困るので。  
テツタキ……照り出したから、仕事が順調に、干し物には好日。  
テデバノー……狭いけれど広く使う、狭さにも得な面が。

テデンアシデン……手でも足でも有効に使う、運動は欠かさず。  
テデマジ……少し狭いのだが、狭さは使い様で、要領良く使う。  
テデクリヤ……手で上手に練り回して、手作業は繰り伸ばし。  
テデンアラエ……手は洗ってから食べて、手先は清潔に。  
テテチョチチョチ……幼児の覚えた拍手は可愛い、笑顔と。  
テドイシヤカスナ……小さな携帯用砥石は減るから貸さない事。  
……減らないからと言っても、貸す訳にゃいかぬが。  
テトリバヨー……簡単に説明してよ、簡単明瞭に、説明極意。  
テドラスル……手で取りながら、手がいろんな仕事をこなす。  
テドイシ……小型の携帯用砥石、野作業には必携用具。

テトテジ……手と手が有効な仕事を形成する、どんな技法も。  
テドリャコス……手取りならば安心できる、手取りにゃ人情愛。  
テドリンモウケ……手取ったものには思わぬ、そこに儲けが。  
テーゲー……たいがいには、よくよく考えての動き、ほぼ。  
デーチ……抱いて、出して、第一、出しあって。  
デージ……大事な事で、たいらな場所で。  
デーチャル……抱いてあげる、出してあげよう、出すから。  
デーブンナ……だいぶんな、大部分は、予想以上に。  
デーラ……平らな場所所、平たい見晴らしの良い広い場所。



命

顔なじみん仙人の 吉さんがヒョコット顔で一た。『ありゃ珍しいこつ お元気じゃつんな』『いいで こげ見てん』そん笑顔にゃもういつも 勇気やら元気やらを貰うき なんか話も弾んじ時間が おしなぎゅうなっちしまう。『こん前言いよつたあん 話しな 今日は暇じゃき来たき』 気にかけてくれたんじゃろう 汗う手拭いじ拭くんも 絵になる。

日本人の体にゃ 米麦う主食とした 食べ物が一番デージじゃあきが 仙人の持論でんあった。そりー魚やら野菜なんかが うまい 具合につれのうち 言わば『和食』ん体質が 出来あがっちよるきじゃねえ。そりゅうまた チャント受け継いだ 日本人も偉えち思うな。

味噌、しょうゆ、こげなんにゃ発酵味が あるき四季それぞれに うまい具合に使い分くる。そん調理する伝統ん 食いもん文化が育ち来たかるじゃろう。朝飯にゃ『ご飯に味噌汁』でんアカンのも 不思議じゃねえ 理想的ち思う感性が 備わったとん言えるち思うで。

これが日本人の栄養ん バランスが取れちよる 何よりん証でんあろうな。そん一つ一つん持った味う 大事に引き出す コツ 基本ぬチャント わきまえち知恵を絞る 手が自然とそげえする 暖かな気持ちと 一体となるもんじゃき いつんなかめーか 『やっばウメーノウ』ん 味に変身しちよる。

じゃけんどこん頃は ちっと様子がヘンチクリンに なったごたるなえ。肉や乳製品ぬ使う そげな傾向が多うなったがそれが悪いんじゃねえけんど 片寄ったり 慣れっこになっち 感覚がチゴウチ来ると どっちん味がいいんか 迷うこちなると 待ったんがいいんかん しれんな。

慣れた和食にゃ大きな 原因基本になる 水と土があるごたる。仙人の吉さんらしい そげな話が久しぶりに 聞かるるもんじゃき 五助さんも夔のりで一ち前に出た。『そげ一なると ついよそかる買うこちもなり 折角作ったもんが 残るごたると ゆう出来た野菜やらが ムゲネエこちなる。

水と土による作物 それに頼った人間の健康 それも長い間の相互扶助によっち お互いの健康と経済が 共和しちよりもしちおったわけ。じゃきこげな理屈を知る 栄養んバランス そげな面まじ考えあわすりゃ 地元じ取れた物う 地元じ消化するんが一番 理想的でんありゃ しめ一かな。

慣れ親しんだ土や水は 欠かせないごつなっちよる。戦争時代南方に行った兵隊が 脚気にかかって困難。薬もあるけんどそん原因な かんたん麦飯抜きん 米飯ばかりが元起こし。ビタミン不足やら水があわん 体調管理にゃこげな などもあつたごたる。『麦飯味噌で一』 健康食優良児童じゃつた。

理屈が解りゃ薬ん使い道も すぐ解るが遙か南方じ 麦飯ちゃ無理でんあつた。そげな大事な水が 人間の体にゃ70パーセント 入っちよるち言う。そん水は大地に降つた雨が 土に染みこみ長え時間かけち 地下水になっち いろんなもんじ濾過しち貰うち出ちくる時にゃ ミネラルやら 水ん味が調和されち いつもんごつ飲むに 病気も腹痛も起こさぬ 純粹なの飲み水になっちよるき不思議なもん。

一方ん作物もこげな 水を吸い揚げち育ち 人間の口に入る時すんなり 迎えられる巡り合わせは 長い間に育ち培われた 命の元でんあるごたる。単なる水じゃが そこにゃ尊い命の元も隠されちよるごたるが どうじゃろうか。自然の仕組みに素直に従い お互いが助け合う時 幸せは宿るもん。



水の味は説明は出来んじゃろうが 舌はゆう覚えちよるもん。じゃき土じ育つ作物も 太陽んエネルギーによっち 光合成されち人間にでーじな 栄養素になっちくるる。じゃき近所じ育つた作物ぁ 自分の体にもピタット 備わっちよるようなもん。じゃきソゲナモンぬ 食いよりゃ病氣もせんし 病氣かかってんすぐゆうなる。

昔かる朝出ち晩方帰りつく そんくれん場所に出来る そげなもんなら食うてん 病氣はせんもんじゃ。そこに同じものを食べよるもんじゃき 病氣する理由が 成り立たんこちなる。じゃが暴飲暴食ぁ別で。どんこんねえ 腹一つくうたんじゃ 責任な持てんけんどな。

同じ水じ育つんじゃき 病氣せんが本当じゃこと 理屈ゆうなら同じ川に添う土地に作った 作物なら病氣はせん。ち昔かるゆう言いよつたもんじゃが。ときにゃ盗んじ食うたんが トッペン所かる来たんなら 話しゃべつじゃがな。油断ならんけんども ああんまり盗み食いはせんこつじゃな。

シイタケも日本のなら 水につけちよくと黄色な 汁が出るんが一番 旨え味ん出た証拠。よそかる来たなぁこげな 黄色ん汁はでらんき 水と土が違うと コゲマジ違うき不思議。そんくれ食べもんの味ぁ デリケートかんしれんな。こげなふうに 日本の水や土にあわんな 体にもゆうねえわな。

諺と病氣は口かるち ゆう言うけんどもソントオリじゃ。ぼかんと口うあけち 昼寝しちよつたに 蜜蜂が口ん中え入っち来た。アメガタう食いかけち 寝たんかそん匂いに 蜜蜂が飛んじ来たんじゃろう。はようおすう 口うつぶすとチクリ 大事うツクリ タツルデナエ。蜂もイノチキじゃけんども 人間の口まじゃダマシハイリヤシメエ。

日本な火山が多いき 土も火山灰がマジックンガ 多いき通気がいいもんじゃき 水ん浄化もうまい具合に 美しゅうなっち 飲む事が出来る。大けな山ん滲みこんだ水は 長い時間栄養素ん中を 上手に潜っち出る時にゃ ほりゃもう美人になっちよる。湧水どま味もいいし 水温も年中同じじゃき 勿体ねえごたる。

よそから入った種物やら 球根が痛みやすいんも 土に馴染まず水の関係もあるごたる。『種物屋が念力かけちやる』 そげな話もあったが やっぱ土と水ん関係が 大きいもんじゃき 毎年となると自然と 弱っち息続かんごたる。そんくれえ水、土、ん力は大きいもんじゃろう。

家畜はそげな点じゃ 物こす言わんけど すぐ解っち目を見かえしち 『こりゃ違うで』ち 目じ合凶しよる。それでん気がつかんまま やっちょくと 仕方のう鼻じセリノケチ イイ分だけ食う利口者。そんくれ敏感にっちよる。農業なんか使うたんな すぐ 解っち口をそむけち 食わんのでムゲネコサレ。

虫がついちよると 嫌われるがそれだけ 農業利用ん可能性もあるごたる。おいしいものにゃ虫はつきもん。人間でん一緒じゃねえ。おいしくないんにゃ 虫もつきにきーが 家畜を騙しち 無理やりに虫がつかんごつ 予防したり『遺伝子』組み替えなんかは どう思うてんアブノウジ コタエンガナァ。

自分じ作っち食ぶると チョコットん味ん違いも ゆう解るち言う仙人。たしかにそげえあろう 土や水が変わラン ノジャキ味も 変わらんが本当じゃろう。ただ調味料じつけた時は 違うんが本当じゃけど。ごまかされんごつしち 食べものは安心安全なもんを食べてな。どげー言うてん『健康は幸せん原点』で すきなぁ ふんな又次ん機会に 仙人の話しゅお願いします。



- 35 P ヒョコット…急に。いいで…よいですよ。こげー…こんなに。おしなぎゅうなっち…惜しくなって。デーじャ…大事なことで。チャント…しっかりと。こけなんにゃ…こんなものには。アカン…飽きないので。そげーする…そのようにします。なかるうか…ないでしょうか。やっぱウメーノウ…やはり美味しいですね。じゃけんど…ですけれど。ヘンチクリンニ…変に変わったような。チゴウチ…違って。どっちん…どちらにも。
- 36 P もんじゃき…ものですから。ムゲネェコチ…可愛いそうに。じゃーき…ですから。しめーかな…しないことに。味噌で…味噌だけでもオカズ《副食に》になる。どうじゃろうか…どうでしょうか。
- 37 P ちよるもん…そのよにして。ピタット…急に。旨い具合に。じゃきソゲナモンヌ…ですからそんなものに。じゃが…ですが。どんこんねえ…どうにもならん。腹ひとつ…腹いっぱい満腹に。トッペン…変な事から急に。じゃな…ですね。こげな…こんな。こげまじ…これほどまでに。けんど…けれど。アメガタ…固めた飴。ツクリタツルデ…おだてて世話役に。イノチキ…生活。ダマシハイリャシメー…急に入っては来ないでしょう。
- 38 P マジッタンガ…混じりこんだ物が。ほりゃもう…それはもう。そげな…そんな、やっぱ…やはり。やっちょくと…やっておいたままにしておく。セリノケチ…おしのけて。アブノージ…危険で。コタエンカナ…あんまり困らないかも。チョコット…すこし。ノジャキ…そうなのです。どげえ…どんなに。ふんな…それでは。つきにきーが…嫌って寄りつかないが。



昔かる田舎ん強壯剤ち 言いよったんがニラ、ニンニク、山芋が3羽烏じゃつたが こん頃ぁどうしち 健康栄養食に入るんがシイタケ、シソ、ミョウガ、も仲間入りしたごたる。わりかた手近ん場所にあっち いつでん使いよるき 親しみやすいごたる。それが手入れも 関心も高えきいつでん 使われる食材にもなっちよる。

昔ん時代は忙しいとつい 季節によつちゃ 『ばっかり食い』にもなりよった。がこれも畑ん高度利用に 結びつくき机上じ計算するごたる 調子にゃいかんけんど 理屈は成り立つもん。畑は3種類ぐれが 年間輪作じ栽培するき いつも空かんじ何か 植わっちよる。じゃき草も元気でーてん 太らんうち根こそぎ ムシラルル。

ニラどま庭先2, 3株植えちよりゃもう いつでん何でん役にたつき『チンタツクサ』チ 言いよった。切った後にゃクドん灰を 振りかけちよきゃ 時んめに伸びあがっち『ここにあるで』ち 朝どまそよ風に おいでおいでしよる。味噌汁に入るるか味噌にまめしち食うか 使い道にゃ困らん。

長い間ん生活ん場にした 故郷ん水は欠かせん命ん元。そり一馴染んだ土ぁ裸足でん 怪我もせんし怪我してん フツ揉んじつけちよきゃ 殺菌して傷口う繕うちくるる。田の中んヒルでん 時にゃ食いついち 血を吸いよるがコサギ落としち 泥田ん泥を塗つくと 不思議な薬効が働いちくるる。

『荒むてなぁち』言われたもんじゃき 『あいつが勝手に吸うき チョコットこなしたんじゃ』 平気じしゃべる元気 お互いがイノチキしよるき 相手ん気持ちもゆう 解るだけに勝手は許さんそいつもユウ解るわな。生きち行くにゅ自然を デージに自然の仕組みに逆らわんじ 助けあうんもいいんじゃねえ。それが宇宙じあり 万物ん掟でんある。

# 結業大吉



## 大分市と佐賀関町、野津原町、合併までん歩み

平成17年1月1日にめでたく合併となった快挙んそれまでん歩み。あれかる12年が過ぎた。経済が全世界じ不安定になっち発展の影じ貧富ん差も激しさを増しち内戦の悲しい現実な国もあるが日本でん東日本震災発生 原子力発電所かるん放射能被害も現れた。ロンドン五輪開催もあった。

故郷大分市は平成23年にゃ市政100周年 大分駅高架実現南北が連なり 東西に合併した2つの町が 新大分市ん海や山ん食料基地としち将来が期待もされちよる。野津原ん場合は奥座敷的な存在に 江戸期間にゃ肥後領としち 今市《当時は岡領》と共に 街道宿場が華やかな 様相を見せちよつた。上り下りする馬子が唄う 馬子唄が人気も呼んじよつた。

§ アオよ いさめよ宿場は そこじゃ  
あれが街道の 石だたみ ハ 七瀬のせせらぎ  
サラサラサラサラ ホイホイホイ §

§ 肥後か府内か 一の瀬渡りゃ  
お国訛りが 懐かしゃ ハ 七瀬のせせらぎ  
小鮎が スイスイ ホイホイホイ §

国の動向…平成11年8月 市町村合併指針策定で事務次官通達  
県の動向…平成12年12月

住民の私見聴取がはじまり 平成14年11月 大分市合併を  
74, 3パーセント希望。大分市も48, 0パーセントが。  
任意協議会設置 平成15年3月26日 以来協議を重ねち  
平成16年3月22日 町議会可決。3月26日大分市議会も可決した。

平成16年7月23日 合併協定調印式。9月22日大分県知事の決定。10月20日 総務大臣告示。

平成17年1月1日 ここに合併が実りました。

平成17年1月18日 合併記念式典が文化会館で行われました。

野津原町をもちっと溯っちみると 明治入った頃じゃ西あ今市村、高原村、荷尾杵村、諏訪村、野津原村じゃつたが明治22年《1889》じゃ 今市、高原、荷尾杵3村が合併しち新しい今市村になった。そしち昭和25年に直入郡かる大分郡に編入。明治40年《1907》じゃ諏訪村、野津原村が合併しち新しい野津原村に。昭和3年《1928》じゃ 沢田が東大野村から 大野町に変更。昭和22年《1947》に野津原村に合併。昭和30年《1955》 今市村、野津原村昭和の合併で成立。34年に町政施行となった。

山間へき地の町村は常に 苦勞に甘んじた生活が余儀なくされるものじゃが 互いに助けあい 支え合う情愛は大きゅうじ 尊いもんでんあろう。じゃきたとえ貧しくとん 心は常に豊かに保つ旺盛な 精神力は戦時下ん 米ん供出にも齒をくいしばった。そん肉体的な鍛え方が 今も存在出来ちよるんか 知れんごたる。

戦国時代は焼き討ちに 戦時下じゃ 供出に 常に犠牲になる立場にあったが逃げ延びた人たちん 救援や弔らいは欠かさぬ人情が 施しが考えると今報いられる 健康に過ごす束の間ん 幸せかん知れない。となりゃ今立ち止まっち 振り返るとまあ『ゆう頑張ったち』 勲章何んかは貰わんでんなえ こらえよなえ。宛にゃせんが いいち思うわ。そんうち残りがありゃな。くるるかん知れんが まあ宛にゃならんき。

## 野津原は第二の故郷 青年の思い出

もう55年以上も前ん話じゃが 疎開しち骨を埋みょうかち親は思いよった。本人もそん気じゃつたき 労働軽減するごつトッカカリヤ培土機じった。畝幅うちと広うしち はじめは勿体ねえち思いよったが 腰う曲げち草取りするんも 伸びた稲株ん間を目をチクチク つかるるんも辛抱しち何べんも 草取りしたんが嘘んごつ早まる。

はじめは培土機じ株んはった 株元に土を両方に寄せち行くと 溝間ん空間が広うなっち 陽が具合ゆう入っち 光合成ん栄養が株かる吸い上げらるる。草取りも兼ねた時間も短縮されち 反当たり1時間もありゃ済む。ブンケツした茎ん穂は長うじ粒ん実入りもいい。定期作業推進は肝心でんあつたが。

培土2回じ4寸はず 株にご褒美じ後は入られんのも 主な根を切断するからじ 水を落としたら大きな割れ目が 出来るぐれ干すことじ深根が伸長 肥料効果も目立ち現れ 根腐れ防止 根数増加 倒伏防止 雑草防止何かにも響き 労力ん配分効果も他に振り向けち 収入確保に役立つこちなつた。

農業も機械化文明になるごたる今 冒険かん知れんが取り組む そげな勇気がぼちぼち要求されそう。取り組んじ収穫しち結果がゆうじ はじめは錢勘定もしちみたが 親が気を揉みよつた顔色がゴロリ 変わったぬ確認すると 『親孝行出来た』ここに来たことん 巡り合わせに感謝したもんじゃつた。

話しゅう聞いち5, 6人が そん気になっちよるんも嬉しいき 自分も本村の産業振興んために お世話しながら頑張りよりガイト米を生産して一もん。まだまだ工夫が出来そうじゃが。やっぱこき来ちよかつち思う。

炭を買っちもらうぐれ 嬉しいこた一なかった。まだ欲もねえ中学生じゃき親ん苦勞は 手に取るごつ分かる年にゃ なっちよつた。学校が引くとすぐ家に飛んじ帰ると 門先に炭俵が2俵そろえちやる。頼まれんぶんが今日は 現金になるち思うと胸も小躍りする。

学校に納むるに困るんじや 親もセツナギーじゃろうし 子どもも言い訳がいるこちなる。先生も理屈は理解しちくれてん 甘えは許されん時代でんあつた。

かばんを側にせりやると 母親が『こびる食ぶる』 きまっち芋ん蒸したぬ一皿にもって 『うん ひとつ食ぶる』 無造作に口に入ると 背板に炭を乗せた。子どもにちった重たいぐれじゃが 体格がいいきそげ一は 苦にゃならんごたる。そんくれ気構えも違うちよつた。

約束ん家ん前まじ来たら 隣んおぼさんが『今留守しちよるき 錢預かちよるで』と 気安く受け取ちくれた。農家じゃ夕暮れまじ仕事が多い じゃきつい帰りが遅うなると せっかく来たに待たせちゃ悪いち 思った心くばりが嬉しかった。炭を卸し錢を受け取ると 丁寧にお辞儀した。

『あんたゆう働くなぁ あいご褒美』と 新聞紙に包んだイモアメをくれた。ここに来ち はじめち出会うイモアメ。子ども心に嬉しさがこみあげ 早く帰ち妹 弟にと 先を急いだ。もう夕暮れも薄暗くなちよる。家族ん顔がほんのり 浮かび上がった。

上り坂もわが家に帰るには 足も軽いし錢ももらった。みやげも……待ちよる妹、弟ん顔が笑顔が待ちよる道。あれかる60年余り 懐かしい第二ん故郷 野津原ん思いで。



◎◇◎◇◎ 里の唄 踊り唄 ◎◇◎◇◎

昭和52年《1977》民謡研究家 加藤正人が県の要請もあつち 県内くまなく大分 民謡 発掘に取り組んだ。野津原にも入っちくれち 老人会、婦人会なんかにも 呼びかけたが 『うっ とオカシイ 唄いきらん』こげな 調子じほんの10人はずが 集り 公民館じ打合ゆしち 録音。

そんあつー10日はずかけち あんげこんげん唄を そん場じ取り 20曲ぐれは まとまったけんど なんさま口説き唄んごつ 人かる人に聞き覚えんごつ 覚え伝わったんじゃき シェントシタ曲とか 詩もはっきりせんんが 多かつたが そかー研究家じゃき すぐ録音機かる 出ちくる唄ん節に ソウコウシヨルなかめ もう 譜面にサラサラっと できあがつた。

そん時ん録音した里ん唄ん 主なもんじゃが《こん分な昭和59年7月30日永久保存用に録音したもん》

田植え唄。左衛門。ホーチョヌベヌベ。お城のさん。自転車節。  
出演 小野肇、赤星利雄、吉野フサ子、井下キヨ、安田ハルエ、  
三ヶ尻ムツ、他ん皆さんじ 県かる 県職員 の染矢多賀男、  
ほか 文化芸能関係者。

手鞠唄なんかに見ると 肥後領地らしさが にじみでちよつち おなじ歌詞んなかでん チョコットちがうのなんか 色気があつち いいもんじゃつた。手鞠唄は室町時代かる 唄われちよつち言うき 時代ん移り変わりじ そん歌詞も変わち キタンガが領ける。オオサマダイショガ ここ でん 王様在所ち野津原は唄うが 時にゃ潮待ちしよつた 杵築あたりじゃ 王様蛙がち唄うごたる。やっぱチツトン時間利用でん 親近感があつち 子ども唄にゃもう そげなふうに 仲間に入ちよつたんじゃろう 嬉しい事じゃな。

## ★ 手鞠唄

おしろのさん おんさま在所が イッチョゴで おかごで  
イッチョサノサ さしたかどん しのぶかどん ドンドト鳴るの  
は ドロガミさーまか イッチョゴで おかごで さしたかどん

しろきやの おこまさん さいださん たばこの けむりで18  
歳 ひーふーみーよー いつ むう なな やー ここ とー  
たばこのけむりで 18歳。

こん手鞠唄は 肥後領地域じゃ 唄われちよつたが 杵築市じ  
ゃ やっぱ相 通ずるもんがあつたごたる。《加藤正人話から》

## ★ 竹刀踊り

入蔵、矢の原地区にゃ 古くから『竹刀踊り』が 伝わっち  
山作業する 人たちが持ちこんだよう。地域の交流じ すぐに  
ひろがり 盆踊りでん使い そんな元は 親の敵討ちが 主流に  
なっちよる。加藤が発掘した頃ん 特産物にもなった。それじ  
みんなが知り 特に老人クラブん 舞台じゃ懐かしい 哀愁さい  
感ずるき 取り入れられた。

じゃが踊るときにゃ 3人ひと組ん難点があつたが 竹刀ん音  
が回りに 響くき哀愁と勇壯と 優雅さも持ち合わせた 特有ん  
おどり おまけに衣装も しつらゆるとこれまた 絶品にも見え  
ち 若い娘たちん 人気ん的にもなった。加藤正人が作曲した  
七瀬馬子唄ん歌詞かる 引用した踊り口説きも 定評になっち  
中部小学校じゃ 運動会ん集団演技じ 見事晴姿がアップされた  
。今までほとんど知らん 加藤正人と民謡 それが故郷ん馬子唄  
と ドッキングしたき 有名さが広がつたごたる。



★ 竹刀おどり

国は ごきない 河内の国よ サノヨイ サノヨイ  
河内国では のぶよし長者 サノヨーヤセ ヨーヤーセ

すえの 世をとる 春徳丸は サノヨイ サノヨイ  
年は15で まだまるびたい サノヨーヤセ ヨーヤーセ

ここに 説き出す 団七の サノヨイ サノヨイ  
いわく 因縁 口説いてみましょう サノヨー ヤセ  
ヨーヤーセ。

こげなふうに 親の仇討ちするまでん ストリーが 歌詞に  
切々と語られちよるき 聞いちよるうちに 踊りの姿とダブル  
セチ 哀愁を呼ぶ。

加藤正人作曲ん『七瀬馬子唄』が 出ちかるは 地元で馴染む  
歌詞に乗せたんが 効果的と とちゅうかに そっとその歌詞  
に乗り換えると なんかスンナリ受入るるごたる。特に集団で  
演技する 小学生ん場合は 地元ん歌詞んほうが 親しみやす  
いき 違和感ものうじ 校庭一杯ん児童ん あいくるしい姿に  
歌詞よりゃもう 目を奪われよったごたる。その乗せた歌詞ん  
い一部てす。

肥後か府内か 一の瀬渡りゃ サノヨイ サノヨイ  
お国訛りが なつかしい サノヨーイヤ ヨーヤーサ

馬に揺られて 旅する人にゃ サノヨイ サノヨイ  
馬子のひとふし 心に染みる サノヨーイヤ ヨーヤーサ

秋葉越ゆれば 火伏せん森に サノヨイ サノヨイ  
ふろー煮えたか 諏訪の灯じゃ サノヨーイヤ ヨーヤーサ

農家ん夕飯しゃもう『だんごじる』が 定食に決まっちゃつた  
き 晩がてなりゃ どころ家でん独特ん 味噌仕立てん夕飯が  
できあがる。そん粉を練っちチョイト 寝かせるまじん動作が  
こん『ほうちょぬべぬべ』でんある。年頃にならんでん 娘ん子  
どまもう教えたごつ 見よう見まねじ覚ゆる。

塩加減やら天気やらじチョコット 違うけんどもう手先体が  
覚えちよるもんじゃき『嫁ご貰い』が 来たち聞くと嬉しさに  
『もうダンゴジル焚ききるんじゃのう』と まゝこげなふう  
に冷やかさるる。そん時ん動作を軽快に 唄いあぐるんが こん  
唄じゃが

堀起こしん加藤が一番ヨロクウダンガ こん『だんご汁』じ  
具財はなんでん季節ん 旬のもんが飛び込んじよるき そりー  
お手製ん味噌ん味 とろりと滑らかに 口に入る食感はまさに  
天下逸品ち言う褒めよう。そりー伸ばしち二つにサット割く  
こん 特技は豊後独特じゃろう。

ホウちょぬべぬべ 今夜の夜食 チリツテシャン アラ  
ヨイショ ヨイショ  
早く ぬばねば 夜があける ソレエヤ ソレエヤ  
ヤトヤンソレサ。

盆の16日 おばんかて行ったら チリツテシャン アラ  
ヨイショ ヨイショ  
なすびきりかけ フローの煮染め ソレエヤ ソレエヤ  
ヤトヤンソレサ。

だんご汁ちゅうな 小麦粉を潮と水とを定量に混ぜち こねる  
麵料理ん一種じ 米の食い延ばしに考えた 苦肉の食生活ん  
知恵じゃつたんが 栄養価も材料ん善し悪しも 嫌わないし  
焚き立てでん 冷たくなつてん 暖めてもそれぞれん味が楽し  
める まさに代用食ん王様じゃろう。



# 五助 街道物語



宇曾山物語  
(5)

『宇曾の大根づけ』 修験者が峰を渡る足音と 木々を揺らす風  
の音は 聞き慣れた人にかいいが 慣れん  
人にかしちみりゃ 異常に聞こゆる。一夜ん仮寝を求めち ワラ  
ジを脱いだ旅人が 夜半に目を覚みたら 土間ん母娘が ヨナ  
ベ仕事う続けよる。山仕事ん縄をナイヨルンカ 手は荒れちシワ  
が並び 冷てえ夜風が 隙間かる遠慮のう 吹き込む。

大根の冷てえんな 一層厳しいけんど 母も娘も頬赤らめち 励  
む姿は旅人にか 慈母んごつ受け取れた。一碗に盛られたカユに  
そっと添えた 大根漬けんそん色 香りそしち味が こん人た  
ちん情けを 素直に通しちもくれた。こん旅人にか生涯 忘れら  
れん人ん情けを かみ締めたことじゃろう。

旅立ちん朝 包んじくれた アワメシんにぎり飯に 大根漬けが  
取り合わせち 上品に並うじよる。丁寧に頭をさげると 『気を  
つけて行ってください』 可愛い口もとかる 弾む声じ差し出  
した 弁当包み。『お身大切に』と 受け取ると 『うっとう達  
は大丈夫……ご機嫌よう』

見上げた宇曾ん峰に 修験者ん白衣姿が 木の間かくれに 眺め  
らるる。旅人は感謝しつつ 去った。今も残るアワガラを 入れ  
ち漬ける大根漬けん 風習はそん昔かる 宇曾ん里の味としち  
生まれ育ったもん。旅人もトキを開いち あん親娘を忍び 宇曾  
ん一時を 思い出すことじゃろう。

- § 宇曾に行こうか 荒木に出ようか 四辻峠の 思案顔  
ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ。  
§ わしモなりたや 宇曾さん山の 風になりたや頬風に  
ハ 七瀬のせせらぎ 小鮎がスイスイ ホイホイホイ。

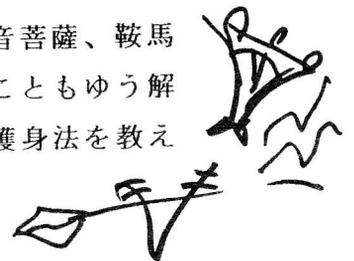
野津原じ安政年間《1855》に 手永指導ん藩士 脇義が文武両道を指導しよったが 武芸ん講義をはじめ 素読、習字、宝蔵院流槍術 親影流劍術 扱心流体術 伯嗜流居合術 そり一砲術なんか 全般に及び若い人たちん 勉強ん機会が明治ん 始めまじ続いた。

武芸はさらにそん 流れを引いた者によっち 戦前戦中まじも続き こんほかにも寺小屋式 学習機関を 医師、僧侶、役人が余暇に 指導しち当時としちゃ もう恵まれた地方じゃった。読み書きソロバンを 体得した人も多うじ そんうちにゃ柳柳の堂は 文武両道じあったもんじゃき 近郊だけじのうじ 長い歴史ん中じゃ大野、庄内、別府、なんかん地名も 書かれちよった。

そげな教育機関は少ねえき 点在したそん時節を はるばると通っち 来たもんち思われる。宇曾神社ん庭じ 訓練した人たち ちゃ 昼ん仕事つ終わった後に あん山まじ登ったんじゃろう。そん不屈ん精神がここまじ 続けられたんじゃろう。そん根性はやっぱ違う そげなもぬーもっちかるこす やり遂げらるる。

そん成果も物う見張るもんがあった そげな理屈が通るごたる 逞しさ 根性が育ったかるこす 負けんで続けられた。そげな心がひろがりそれに 習い覚えち地にち一たき 故郷にしてんも 自慢して一ごたったんが そっここにあったが そりゃもう頷けるる。

野津原郷ん熊谷磯馬 同じく直信、小野光喜ん名入り 古文書ん新影之外物謀略一卷にゃ その作法心得之から武芸の事が記され 鶴戸大明神の名前や 祖神鹿取先生靈位、観世音菩薩、鞍馬山多門天張山坊とあり 宇曾山に祀られちよった こともゆう解る。小野光喜は戦中まじ 指導を続け出征兵士に 護身法を教えたち言う。



五助さんがん話が あんまり上手じゃもんじゃき 連れのうた  
娘もオオモト歴史やら 民話やらに興味津々じゃき のめり込み  
そうになる。で一ぶん歩いち登る 宇曾山じゃがナンカ ひとつ  
も苦にもならんじ イツンナカメーカ もうやんがち石段に着く  
。こかぁ660メートルぐれは ありゃしめーか。

§ 三筋煙りが タナビク谷に 遍路しばしん トキ開かする  
木の間隠れん 七瀬ん水は 炭をオセダス 馬子歌ばやし  
。台じ臼もつ ナカゴウじ 締まる 山と積まれた 実り  
ん里の 主に抱かれち 嬉しゅう泣いた 濡れた瞳の 馬  
子唄はやし。ハ 七瀬ん せせらぎ サラサラサラサラ  
ハイ ハイ ハイ。

五助ん馬子唄ぁ どこまじん 響いち流れち 行くごたる。そ  
ん歌声に 今日ば連れのうた そげな巡り合わせが 人生にゃあ  
るもん。髭面がなんか 特別に優雅に見ゆるき 不思議でんある  
。

ここが660メートルち ほんなこん前に 東京に出来たあん  
スカイツリーが 634メートルち 言うきあんまり 変わらん  
高さになる。そげ一高えんが ゆうまぁ出来たち タマガッタが  
ここも ケックシャ高えき 眺めがもう なんとん言えんすばら  
しいなぁ。

じっとそげな うつろな娘ん横顔に 五助さんも見惚れち 目  
が潤んだ。『若いにまぁ 感心じゃのう』『チャアリヤ 物好き  
じゃのうち 言いてえんじゃねえ』『いんにゃ ふんと感心した  
んど こりゃーシャント話さにゃ 申しわけねんのう』 改まっ  
ち見つめ直した 五助ん目にゃふんと 涙がいっぱい光ちよつ  
た。

§ あれも年頃 針もつそん手 いつか覚えた馬子唄と…唄  
声が山肌を 縫うように伝わち 谷や里にまじ 届くごたる。

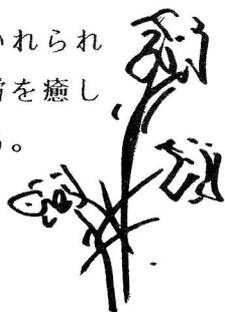
馬子唄ばやし…秋葉越ゆれば 火伏せん森の フロー煮えたか  
諏訪の灯じゃ ハ 七瀬のせせらぎ サラサラ  
サラサラ ホイホイホイ。馬子唄聞いた 夕暮れ時 道を急ぐ人  
たちん心は 木木ん間にチラホラと 見ゆる宇曾の 灯を目当て  
に きっと里えん道を 急いだんじゃろう。足取りも軽やかに。

米井坊に 村中安全 家運長久 子孫繁栄 天下昇平 雨風和  
順風を念じち 法華経8軸を納めた 法華塔が 宝暦17年《1  
716》武田三郎兵衛尉が 建造してある。入蔵じゃ下谷を中心  
に 100戸あまりん 居宅があっち 宇曾山円福寺を 中心に  
浅内、吉熊、権現、野津原、あたりと 道も開けち 府内、大野  
三重、なんかん 中心的場所てん あったき 人ん行き来も多か  
ったごたる。そげなしたちも こん場所が平和じ 静かな里にと  
願ったよう。

円福寺域内にも天保僧ん 墓地もあっち《1830》 当時ん  
広さん名残りが とどめちよる。谷添いに田アラセが 多いんは  
当時は 田んぼとしち植えられたんじゃろうが 苦勞しち先人が  
そりゅう守るに懸命じゃつた 様子が仄かに伺える。サトガラ  
が背伸び ヨモギが葉を広げた そげなんを見てん 大地を守つ  
た 当時が忍ばれるる。

神前に座って 春ん桜の花びらを 酌み交わす杯に 受けなが  
らじっと見据ゆると そんな美しい色が 人ん心まじ染めち くれ  
そうな時が ゆっくりと 流れよったごたる。酒に解けた美しい  
色 揺れる波紋に ふくよかな香りがたつ しばしの時。人ん心  
はきっと 幸せに誘われるんじゃろう。

こずえを渡る風に そっと肌まじほんのり 春に招きいれられ  
た里の 今はもう平和そのままに 自然の中じ 人ん苦勞を癒し  
ちくれよった。小鳥が何か言いたげに そそと鳴いちよる。



遠く連なる山の濃淡が 目に染んで心の底まじ 洗うちくるる  
ごたる。色づき一葉揺れち散る 山ん木の葉にロマン追い 夢う  
託しち訪れた人ん心う忍ぶと ふけゆく秋の陽は 殊更に美しい  
夕焼け。そしち粉雪にひっそり 肩よせあった 幾多ん霊や精が  
山を生ける場所としち 長い間の人ん幸せを 念じた聖地としち  
いつまでん 心んより所に しておきたいもんじゃ。

§ あれは天狗か 白衣の枝に ふわりカカッチ 羨まし  
ハ 七瀬んせせらぎ もみじがチラホラ ホイホイホイ §

◇◇◇ 巡る時代の 波とともに ◇◇◇

明治に入ち参拝者の 寄進による植林をはじむる。一本何銭  
か何厘かん頃じゃつた。そん一本一本を手植えしち 参拝んそん  
折に苗ん成長を楽しむ。自分たち一家一族ん 無病息災を念じた  
そん苗が今もすくすく 育ち山を覆い 見事な美林を作ち  
よる。丹精こめち植えたが そん子そん孫を見守り 育つこた一  
素晴らしい。

先人のこんアイデアに 素直に協力したそん 根底にゃ憎ら  
しいはず 成功しち財産ぬ残したち 聞いた時 わがことんように  
嬉しゅうなつち聞く。こげな思い合う心 支え合う気持ちが  
やんがちそん人にも いつか帰ちくるもんでんある。世の中た  
そうしたもんじ 施しにゃいつか 報いが連れのうちよる。

宇曾大権現鞍馬天狗宇曾山張山坊は 明治《1868》に入  
ちかる 近代ん白鳥社、愛宕社、水天宮、なども合祀しち 宇曾  
山頂に神殿を創りそん名を 宇曾岳神社ちよぶ。それ以来修験者  
の徳力、神霊ん噂も広がり 参拝者も自然多うなつち 信仰する  
人たちによる 社殿建設の声もあがち 取りかかるこちなつた  
。

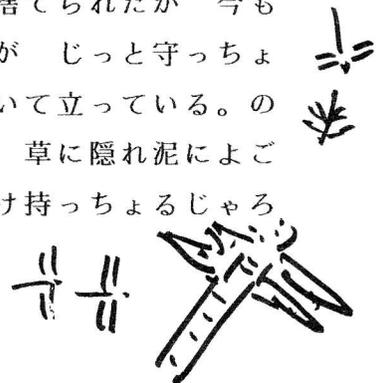
地元んしたちっはじめ 戸次判田なんか大野地方ん 人たちや鶴崎佐賀関にも伸び 造営材を運ぶ船が 大野川を上り そんな運びあげも 奉仕によっちされたそうな。野津原方面から 石運びにゃ力持ちが参加しち 山坂道1里に 元気のいい声が山肌に響きよった。そげなしにゃ 1日酒1合とトーフ1丁じゃつた。

神仏混住じゃつた昔 そんな聖地宇曾山にも 神を祀るとともに そんな 参道ん路傍にも 願いを込めた観音像が 数多くおかれちよる。1丁目ごとに置かれた そんな途中にも100体あまりが運びあげられた。当時相撲取りじゃつた 宗方弾三は『宇曾山かる力を頂きたい』ち そんな運びあげん 仕事を受けた。

古老たちかる本当に 力があるんならち 言われたもんじゃき一晩のうち 運びあげち自分がん ある力を試しち 古老たちに認めちもらい 合わせち宇曾山かるも 力を授かり 大阪に出発した。そんなと有名な力士に なったち聞くと やっぱ地元でん嬉しい事じゃつた。

険しい道を石仏を 運びあぐる姿は 目にいつまでん焼きつき事あるごとに 目に浮かぶち皆言う。そげな苦労があつたに そんなあとん明治になっち 廃仏令によっち ほとんどが廃棄されるなんとなん 痛ましい状態になっち 人ん心が踏みにじられる。心ある仏の無念は いかばかりか そんな天罰もきつとどこかに 現れる事じゃろうが。

道しるべも角柱じ立てられちよつた。じゃがそれも時代の波にや 勝てん哀れさそんな だいぶんは廃棄か 捨てられたか 今もほんのチット見らるるぬ 名残惜しむ人たちが じっと守ちよる。幾つかは当時ん思いひっそりと 胸に抱いて立っている。のが痛ましい存在になった。忘れ去られたごつ 草に隠れ泥によごれたか 寄進した人ん気持ちは ちゃんと受け持ちちよるじゃろう。



- 49 P 人にゃしちみりゃ…人にはしてみると。ヨナベ…夜まにする予備の仕事 のうかには目に見えぬ仕事が多かった。ナイヨルンカ…藁でなっているのか。通しちもくれた…通らせてもくれた。アワメシ…粟がはいったご飯。うじよる…並んでいる。うっとう…私。アワガラ…粟の刈り取った残りきび。トキ…昼食。
- 50 P なんか…なども。さらにそん…さらにそのの。だけじのうじ…だけでなくて。なんかん…などから。そげな…そんな。もっちかるこす…持ってからこそ。ごたったんか…したかったのか。そっここに…そこらあたりに。
- 51 P もんじゃき…ものですから。オオモト…もともとは。でえぶん…だいぶん。ナンカ…などは。イツンナカメーカ…いつの間やら。オセダス…背おいだす。ケックシャ…結構。じっとそげな…静かにそんな。チャアリヤ…あらまゝ。シャント話さにゃ…しっかりと話さないと。
- 52 P フロー…細長くたれ下がって実がつく豆。なんかん…などの。そげなしたちも…そんな人たちも。アラセ…荒れた。
- 53 P カカッチ…うっかりかかって。何銭…現在の1円の10分の1の価値。
- 54 P 1里…約4キロ。もんじゃき…ものですから。道しるべ…道角に方向を知らせる指針の立て札柱。チット…少し。

ふるさと巡り『雪の夜の子守歌』

もう日がたっぷり暮れち 幼い子どもにゃ足ん シモヤケが痛む  
けんど 仕事をしちよる家族は なかなか子ども 受け取っちゃ  
くれん。泣き声に釣りこまれち 泣いた涙は頬を つと一ち流れよ  
ったが ヒモジサも増しち来る。

竹山ん麓まじ来ると 大根が積まれちよる。じっと見つめちよった子守は いつしかん間にそん 大根に伸びちよつた。齒に染るごたる大根の 冷たさと甘さがもう 何もかんも忘れち 食い始めたもんじゃき 今自分が『なにしよるんか』が 別世界ん事 ちなちよるごたる。

と そん時じゃつた ふと気がちーち まつ白い雲が目の前にふっくらと 漂いよるんが見えた。老人がふっと 顔おでえたち 思うと 『今食べた大根は あした納めるもん 一本足らんでん 庄屋さんな どんくれー迷惑するか』ち 言われた子守ん子ども。子ども心に我にかえった まっかな顔じ うつむいちよると そん頭ん上じ 『こんだだけゃ 親孝行に免じち 許してやろう』 そん雲は 時の間に消えち いつん間にか 雲は宇曾山のほうに 消えちしもうた。

子どもを親に返すと そんままツージ 元ん場所に来ちみると 庄屋さんが 足りなくなつた 大根を洗いよる。『すみません それは私が』『いやいや 宇曾山んの神様が ほしいち言うたんじナ』 と言ちくれた言葉に 子ども心にも うれし涙がごぼれた。

『子守もヒドカロウガ 大きゅうなつたら そん苦勞が 役にたつき』 ニツコと笑うち 頭をなでた。涙に腫れた目じ そん顔見上ぐると 深深と頭をさげた。宇曾山の月が 美しくゅう 2人ん顔を照らしちくれた。小雪ん降る細道を 帰る二人ん影が 細長く 映ちちよるが なんかいかにも 嬉しそうな影じゃき 父親と連れのうちよる ごたる甘えが 出そうになつた。

竹に積んだ雪が サラサラと落ちた そん音が娘ん 歌うような音に聞こえたごたる。山肌に響いち。



宇曾山はこげな物語りゅ 今も伝えち人ん情愛が あちこちに  
残っちよるんも 白衣ん天狗かる 貧しい人たちまじが 山を崇  
め人に感謝する 豊かな心が自然と身につき 心に育っちよる証  
かん知れん。五助が馬とともにイノチキする 毎日ん暮らしん中  
にも 受ける人ん情けは そげな気持ちにもなっち 世の中がち  
っとでん皆んなが 幸せにるごつ動いちよるんごたる。

『ほら五助さんの出番で 馬子歌を』 連れん娘がハヤシタツ  
ルキ 調子に乗るごつ唄いで一た。

§ 宇曾んお山は 私ん気持ち 他に木《気》はない松《待つ》  
ばかり…ハ 七瀬のせせらぎ サラサラサラサラ ホイホイ  
ホイ。

§ あれも年頃 馬子唄きけば 針を持つ手が 又止まる ハ  
七瀬のせせらぎ 小鮎がスイスイ ホイホイホイ。

§ 秋葉越えれば 火伏せの森に 谷の瀬音が 呼んでいる ハ  
七瀬のせせらぎ もみじがチラホラ ホイホイホイ。

§ 行かざるまい 待たせた夜は 忍ぶ恋路の 月明かり ハ  
七瀬のホタルも 恋あかり ホイホイホイ。

§ 湯たてしてから お前と二人 起きた息子を寝せつける ハ  
七瀬のせせらぎ 今年も満作 ホイホイホイ。

§ 肥後か府内か 一の瀬渡りゃ お国訛りが 懐かしい ハ  
七瀬のせせらぎ 粉雪が チラホラ ホイホイホイ。

横かる覗きこむごつ 聞いちょつた娘も そんな美声が山に伝わり  
帰っちくるぬ もうシブルルゴツ 聞いたそんな感激が 乙女心を  
燃え立たせたんか 頬に一筋涙が流るぬ 嬉しそうに照れたんか  
『わかったき もう涙拭いちくりー』 ち言うそばかる 自分  
もラッキウんごたる 涙粒うポトリ流した。

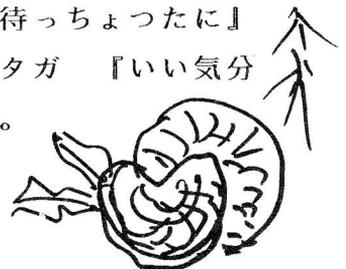
『おおきに わしも馬子唄で一ぶん 唄うたがこげな嬉しい  
こたー 始めちじゃわい オオキニ』 『インゲナコツ ウット  
コス 無理言うち 聞かせちもろうたが こげんこたー めって  
にゃなかろうな』 『じゃのう これきりど』 『また そげんこ  
つう言う』 二人は大声じ笑った。

巡り会うこん娘とん 宇曾山参りん路も もうちっとじ 拝殿  
にたどり着く。『さぁふんな ぼちぼち行くか』 『ちようと待っ  
て 馬子唄に ご祝儀ん ヒヤキ 食べちかるに しゅうえ』  
風呂敷包みかる 出した今朝焼いたんじゃろう まぁちっと温い  
んが 伝わち来る。『祝儀があるんか』

『こりゃーすまんのー』 『すまにゃ 泳ぎゃいいき』 『あり  
ゃ 俺がん株とると 困るど』 笑いながらの ヤシボに食べる  
火焼きん味。娘ん愛情が こめられちよる。きつと ハアジョウ  
が 手がキイチョルンジャロウ。品のいい形と言い 適当な甘さ  
ん舌触りに 年甲斐ものう 仄かな夢も誘われそう。

ここはもう600メートルん高さ 人間の生活環境じ 一番い  
い高さち言うだけに 流れる空気が美味しく 肌にも心地好い  
風が 幸せにもしちくるる。知らない同志でも話が通じ 話題が  
広がりゃ五助も次ん 受け売りにも 役立つじゃろう。ここへん  
にゃツツジが 自生しちよるんが 健康には特にいいち 聞いた  
事もあった。ツツジン芳香は健康にもいいらしい。

『さぁこんだ お前んばんど』 『なにがえ』 『なにがえち 話  
しゅする番じゃ』 『ウットウが 話すんな リャー』 コマッ  
タちじっと見たら そげでんねえごたる。ニヤット笑うと 『ほ  
んな昔話しゅ してんいいな』 『いいぐれか 待ちちよつたに』  
『りゃーまぁ シヨネエナァ』 カオミアワセタガ 『いい気分  
じゃわ』 ち 言わんばかりん 得意顔じゃつた。



## 現在の社殿の姿

度々野焼きなんか失火じ 火災に逢ったりそんタンビ修復したり。そしち現在ん姿にあるが そん間にも銅板ぬハガレタリも そりー 送電線も盗られたり 多難な聖地でんあった。じゃがそれも神のみん知る 相手は今頃あどこじ 何しよるんじゃろうかな。それかるち言うもんな 電気は廃止されち 事祭りん時にゃローソクん灯 自家発電なんかじ賄いよる。

24日にお神楽ん奉納した時代 おこもり堂に人が住みち一た そげな時代を思うと 煙りをモコモコあげち 燃やした火の脇じ 人ん心は温もり千古ん 昔ん世まじんそれが 受け継がれたんじゃろうに 古木ん苔むした独特ん香り 音を立てち裂くる 木の屑ん 別れ行く自然の行きずりに 人ん心もさまざまに変わっち行く。

§ 七瀬馬子歌かる わしの心は宇曾さん山の ほかに木《気》  
はない松《待つ》ばかり。

あれも年頃馬子歌聞けば 針を持つ手が又止まる。

宇曾岳神社由来記によれば ご祭神は  
迦具土神《カグツチノカミ》  
白鳥社《ヤマトタケルノミコト》  
日向国宇戸大明神絵像並びに香取祖師  
鞍馬山多門天張山坊 以上寛延2年《1749》勸請とある。

§ 七瀬馬子歌かる 泣いてくれるな涙に濡れた 母に似た目が  
いじらしい。

明日も来るかち夕日に聞けば 諏訪の米つく水車。  
湯たてしてからお前と二人 起きた息子を寝せつける。  
肥後の殿様お駕籠を降りて 民と夕餉の箸を取る。  
あれも年頃姉さんかぶり いつか覚えた馬子歌を。

関の宇曾講ん人たちん ひたむきな信仰に 似通ったもんに野津原かる 関ん権現参りもある。稲ん穂が出る前に 虫よけにち祈願の札を受けち 立てたことが宇曾講にたいする 恩返しでんある。そげな意味が人情と合わせち 込められたんが伺える。海と山ん交流を求めたもんでんあろう。人は常に優しゅうじこす生かさるる。

宇曾山に夜明けに釣り上げた 大けな鯛を祭りん神前に 供えた心くばりはやんがち 戦時中ん食料が厳しい時 そっと米が通う人ん荷物に入ちよる。魚じゃつち配給制度 いざ祝言になってん まっさきに関ん鯛が いつんなかめ一か飾られちよる。人間の本心なこげな時にこす 現れ助けあうもんでんあろう。

水枕ん焼酎もオオピラニャ悪い じゃが人間の本質は せめても助けあわにゃならんもん。カツギ屋が運び欲しい人に 届くとどんくれ生き長らえらるるか。優しい取扱いは誰も 止められんじ生きるためん 最低ん努力でんあろう。神様に供えた せめても病人に一切れでん食べさせちこす 人間の最低保証ん証でんあろう。

連れん娘も五助さんともう 孫娘う連れた宇曾さんまいりキショクに なっちいつんなかめ一か 目の前に大杉が見えで一た。こん杉ん間の石段ぬ上ると 右に曲がっち『おこもり小屋』が 見えでた。話しよるもんじゃき 時んたつなゝ早えもんじ スラスラスラっと上って来たごたる。

『どげ一なダッタジャロウ』『インゲ ウットまだなんぼでん』ちった掛け値もあつたごたるが ムキになっち元気なそぶりう 見せて一乙女ん気持ちちが 痛えはずゆう解る。こん娘も年頃じゃに俺んごたるジイサマと ゆうまゝち一ち上ってち ここまじ来たもんじゃち 感心もしタマガッチもしもつた。

修験者が厳しいこん地じ 頑張ったそん昔が風に聞かさるるごたる。



## 心寄せ合う時

嫁ぐが近うなったに 娘ん足が動けんごつなった。宇曾山に願ぬかけた父親わ これかるは毎月かかさず お百度参りう始めた。がそん満願の日が近うなったら こんだ父親ん足が悪うなっちそりゅう 聞いた娘ん相手の男が 二人分のお願いん月参りに行くごつなった。

なんと災難なこちーち 思いてーぬじっと堪えた そん男じゃが人はドケンコツデン 言いとなるが常。人ん不幸を喜ぶんは世の常ち我慢しち『今に見ちよれよ』 意地かるでん治しちゃらにゃち 欠かさん月参りに いつんなかめーか 人ん口も75日ん諺んごつ ちととずつ消えかかりよった。

そうこうしよる中に いつしか2人ん足も チットズツゆうなっち歩くまじに そしちお願い解きに3人が 宇曾山にお参りに登った。朝方チッタァ曇っちょつたんも 晴ちそよ風がホーラ 気持ちゆうなったもんじゃき 足もゆうなったし 元気なっさき ついつい油断もしよった。

そん時じゃつたダマシ 目の前に天狗じゃろうか 真っ白い衣閃かしち立ちふさがった。『あ 危ねえ』 若い男は父親と娘を土手に 押しつけたかち思うと 天狗ん前に立ちバタカッチ 目を見開くと『わしが相手じゃ』ち 大声をあげち ムコウチユク。

と真っ白い煙りがパット立つと 天狗の姿はかき消すごつ 見当たらんごつなった。そん途端に男は張り詰めた 気合いが抜け そん場にバタリ倒れた。父親と娘はアンマリン 展開に気もそろになったが 正気に戻ると男に駆け寄っち 『しよわねえん』 『しゃんとせにゃ』 そん声にえーと目をあけた。

えーと正気になった男に にじり寄ると『しよわねえんな』  
いたわる娘に 父親も目を細めち 『やっぱお前たち似合い  
ん夫婦じゃの』 男と娘も 今の空間にあった出来事が 夢じ  
ゃねえかと思ひよった。3人が心寄せ合う絆に 結ばれちよ  
つたんかん 知れんとも思わずにゃ おれんじやつた。

『もしかしたら 宇曾の天狗様じゃなからうか』とん 思う  
思ひはみな同じじやつた。が 感謝の気持ちじここに 3人が  
お参りに来た現実と 考え合わすりゃ ヒョイトスリゃ やっ  
ぱ『ゆう来たのう 礼儀正しい事じゃ』ち お褒めん肝試しじ  
あったんかん。

帰り道々じ3人様ん 答えが出るが何もなかったごつ 時が  
流れたぬ見ると 『やっぱ心試し いつでもシャント結ばれ』  
ち言う 教えじつたんじゃなからうか。ホソん中かゝる小鳥が  
美しい声じ鳴いち飛び立つ そよ風がすーと吹き抜くる 汗ん  
肌コンコロモチイイ。

イツンナカメーカ 若い二人りゃ手を引きおうち チョロッ  
ト見た父親も 笑顔崩しち『おりゃここじ いっぷくするき  
お前どう先い インデンイイド』『ソウナ』 急ぎ足になった  
ふたりは ツージ曲がり道うくだると いつんなかめーかシレ  
ンごつなつた。父親が背伸びしち みよつたがもうシレン。

ヤオラたちあがると くわえたキセルを ほがら吹きだすと  
『今日はいいい日じやつたのう』 『さてと俺もくだらうか』  
若い時んごたねえ 足取りじゃがまあまあ 若いしにゃ負けん  
元氣ゃ 見せんじつたないいいところ。下ん曲がり角かゝる 若い  
二人ん 『キャツキャツ言う声が聞こゆる』ぬ ひげ面なでち  
ニコリ くだり始めた。二人揃えばこの世も楽し 父の元氣  
がなお楽し。五助さんの馬子歌が山肌流れよる……。



## 五助街道物語 『宇曾の神との巡り会い』

昭和61年《1986》資料まとめて 第1回を発行で資料を頂いた 多くの皆様のご縁のある日 宇曾神社の御神影を 預けたいと連絡を頂いた。後藤悟様の申し出に 胸躍らせてお伺いした日。元村長職一の瀬豊様の 口添えもあったもので 『近日中に納めたい』 そんな希望もあって 一応お預かりして帰宅。

4月29日わが家の床に表敬 お迎え申してたがその 主神迦具土神に接する時まさに人の心を 制し無病息災を念ずる霊神の 思いが心に通って不思議なご縁と その巡り会いに感動した。いつ誰がどんな理由で どんな方法で書いたのか それが回り回って来たのか 故人となられた持ち主の お話は不明であるが 9月23日秋分の日 に 奥の院に納めて頂いた。

以前に本殿に申し出て お払いを受けた際には 神職にそのお姿が小躍りして 喜ぶ様が静まりかえった 奥の院に写し出されて 当時の神職が 『お宅でお祭りされる事が大切』と 諭されて自宅にお祭りもうしあげていた由。この調査を始めて10年あまりの 目に見えぬ世の動きの中で 宇曾山を一体とした 古くからのさまざまな姿が やっと表面に記録されることを 安堵して再び故郷にお帰りの 機会を求められた のかもしれない。

少し右に体をまわした立像で 左に剣を帯び右手は隠れているが 咄嗟の際の除剣には 応じられる気圧があり 伸ばした髪の毛のはしばしには 万民にいつでも幸せを分かち合う 濃やかな心くばりが感じられ 目は鋭くその形相から いかなる悪魔分霊も たちどころに睨み殺すと共に 悩み苦しむ者には慈悲の 目のようであった。

雲に乗って瞬時に行動する 力を表していると受け取れるよう。

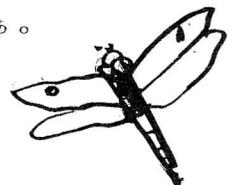
宇曾神社御神影 大分郡入蔵村鎮座とある 朱印は宇曾神社の  
印。じっと目を閉でちそんな時 お姿の中にこれかる 数多くん人  
が悩み苦しむ 悲しみつつ救われたなんかん 霊神と行の力によ  
って 受けた幸せは実に尊く ありがたいもんじ あったち思わ  
るる。施しにゃきっといちか 報いがあるもん。

奥の院にお納めした人 そんな連絡の口利きん人 それぞれん人  
生が終の身の別れは とてん穏やかな眠りち 追憶するようじあ  
たとか まさに神が招いたんかも しれんな。関わる因縁も世話  
をする立場も それぞれが宿命に結ばれた 現世であったんじゃ  
うが そげな巡り合わせに 優しい心がお手伝いしたんも これ  
人生の宿命であったんじゃろう。世の中そげしたもん。

静まりかえちおる 山の頂きの奥の院じゃ 庶民が『よかつ  
た』ち喜ぶ 幸せな呼吸の中に 人としてんなしうべき事う 心  
こめちん事が 年月の流れの中で じわっと評価されちよる。  
すべき巡り合わせにゃ 気持ちゆう手をだし 支えちよきゃいつ  
か 世話になる事ん多い これが人間の世の中じゃろう。

あれかるもう30年あまり 世の中はもう景気がよかつたり  
おおごん世の中になつたり 戦争がいつまでん続く。なし人間  
同志じゃに 話し始末が出来んのか 不思議じならんことばかり  
。世の中が進んじ進歩 発展しよるに人間の頭 いったいどけな  
ちよるんじゃろうか。一億総白痴ん懸念した時代がなえ。

話合いがそげー こみいっちょりゃせんごつ シヤントセニヤ  
笑わるるがなえ。物がねえ時代でも わけおうちイノチキしたに  
今は あり余ち喧嘩したり 欲引っ張り合うもんじゃき 喧嘩  
んた絶え間がねえ 不思議な世界。欲ち銭が財産が肩書きが 何  
なんのかなあ。三途ん川じ沈むがえなえ。ほどほどがいいんで。  
皆んなじ分けおうち 貧富ん差はハヤランガエなあ。



◎◎◎ 方言説明 ◎◎◎

- 59 P タンビ…たびたび。ハガレタリ…取られたり。じゃろうが…でしょうが。おこもり…住み込みでつめている。わしの…私の。米つく水車…クルクルと。湯たて…湯で疲れた足を暖めてゆっくり休ませる。民と…領民たちと夕食。
- 60 P こす…だから。やんがち…やがて。じゃつち…でも。祝言…結婚式。オオピラニャ…ないしょで。じゃが…ですが。カツギ屋…担いで品物売りに。キショク…気分の。ダツタノデハ…疲れたのでは。インゲ…いいや。ウット…私。ゆうまあ…よくも。タマガッチ…びっくりして。
- 61 P ドケンコツデン…どんなことでも。見ちよれよ…見ていなさい。ちゃらにゃち…やらないと。そうこうしよる…そうしている間に。チットズツ…少しずつ。チッタァ…少しは。ダマシ…急に。ムコウチユク…相手をしてゆく。アンマリ…あんまりにも。しよわねえん…世話ないですか。
- 62 P やっぱ…やはり。ヒョイトスリャ…もしかしたら。シャント…しつかりしないと。ボソ…木草が茂ったいる場所。コンコロモチ…とても気持ちがよくて。イツンナカメーカ…いつの間にか。チョコット…ほんの少し。インデンイイド…帰ってもいいよ。ソウナ…そうですか。シレンゴツ…見られないように。
- 63 P
- 64 P これかる…これから。なんかん…などにも。とてん…とても。そげしたもん…そうしたものです。なしうべき…しなくてはならないので。なし…なで。そげなっちよるんじゃろうが…そうなっているのですが。そげー…そんなに。こみいっちょらん…こみいってはいないので。シャントセニャ…しつかりしないと。ハヤランガナエ…そんな事はもう通用しないから。

紆余曲折ん時代が いつんなかめ一か流れちおる。昭和37年  
《1962》にゃ 農家ん米ん収穫が最高記録を。戦後17年目  
にしち農家は 自負心が湧いたごたる年になった。そしち野津原  
ん4農協も合併した。苦勞した農家がよいよ 正念場になっち  
家族が一緒に 取り組みゃ裕福に暮らせる。みんなの夢じゃつた  
が そんな瀬を過ぎた頃かる 農家ん苦勞が別の方に 押しやられ  
た時代になっち行く。

昭和45年になると『減反』の 名のもとに田んぼに米が 植  
えられん時代になった。それに若い働き手が 都市集中する時代  
になりかけよる。収入んバランスもある 農家ん2, 3男たちん  
働く場所が変貌しよる。世の中も成長しち行くき 考え方もチッ  
トづつ変わるのん 無理はねえが。

こげな移り変わりをじっと 眺めちよる宇曾ん神は 果たしち  
どけ一思いよんのじゃろうか。子どもん出産も少のうなる それ  
が『虫封じの神』に 彼岸の中日ん祭り情景も 変わっちくるが  
もう 隣り座ちよつた連れん娘が 話しとうじマイマイしよる  
が 今回はこころへんじ 筆をおいち次のん機会に そんな話しゅ  
頼むな。『エもういいんな チャーうっとガイト 話したかった  
にのー』 『すまんのや……』 『ふんな泳ぎよ』 プイと横むい  
ち腹立て袋ん格好 それが又初な娘じゃき 尚更エエラシイ。

宇曾群山くれない染めて 霧が匂うよ朝山かえり

可愛いあの娘は 誰の花 ソレ野津原ヨイトコ

ソレ野津原ヨイトコ ヨイヤナ。

《野津原音頭》

さとは宇曾からみどりの野から 明けりゃ川面に鮎が飛ぶ

揃うた揃うたよ心もひとつ 野津原よいとこ七瀬の里は

いきいきいい町 ソレ 人づくり



# ちゅうばり

ちゅうばり



て テナイ……手で上手になう、慣れた手つきがいいものを作る。  
テナズケチ…上手に思い通りにさせて、相手の心を読み取る。  
テナグサミ……手遊びを覚えて、手先が器用で何事もうまい。  
テナガデン……手が長いので便利、小回りが聞かない欠点。  
デナリカウ……新しい物好きで早買い癖、納得せずに失敗の。  
デナンナチ……出なさんと言うても、出しゃばり性格で。  
テナミユウ……うまい手法を拝見、特技が素晴らしい達人。  
デナーエ……出なさいよと勧められても、引っ込み思案で。  
デナリ…出たとおもったら失敗、慌てた去り行きが笑い誘う。  
テナシ…手不足で仕事が遅れて。忙しいと慌てて失策が多い。

テナオシ……補修したり植えつぎしたり、無駄になる事も。  
テナズクル……うまい具合に引きこんで、慣れるまでが苦労。  
テニマジュ……手にうまく馴染ませて、通い合う手と心ん絆。  
テニモタシー……手に持たせたら上手に、握る力は強いので。  
テナアバカン…手にはとても持てない程の、あまりの多さに。  
テニチーチョル……手についているので、手についた汚れで。  
テニスル……手に引き寄せて仕込む、手に入れば使い上手。  
テニチータ…手についていたので、手で覚えた技術は高価なもの。  
テニオエン……とてもじゃないが、上手には負けるので。  
テニツクル……手に覚え込むまでは、覚えたならこれからは。

テニマメラン……てにはとても馴染まない、手がごぼれそう。  
テヌイン……手で縫い上げた、手製の高価な着物は味わいが。  
テヌリーナ……暇がかかるのはもっと、慣れるまでの苦労は。  
テヌキスンナ……誤魔化しは恥さらし、性格がなによりも。  
テヌリナドンナ……遅いのは自慢にならぬ、早く性格が一番。  
テヌリクウジ…手がうまく動作せず失敗、練習が大事な初歩。  
テヌリャコス…遅くでも丁寧性格に、早くても失敗は無意味。  
テヌカリャ……間違いなしでこそ完成、誤魔化しは恥さらし。  
テヌリュウジ…遅くても自然に慣れて、正確な仕上がりこそ。

て テネクメ……手を暖める道具、寒さから暖房で手足を暖める。  
テネギー……手仕事にゃ念入りで、得意な仕事にゃ精魂入れて。  
テネブリュウ……手をなめ回す幼児の、指が一番使いやすい。  
テネクリマワス……手で当たり障りして遊ぶ、手指は役者でも。  
テネクル……手がいろいろに働く分身、不思議な動きもできる。  
テノリン……手に載せて可愛いがる、手に載せて育てる動物。  
テノフチュウ……手の平の回りを、虫には手のひらはグランド。  
テノサキャナンカ……さて爪かな、向こうの景色、未来の夢。  
テノトカキリ……手のひらに横に直線が、手相での意味解説。  
テノベ……手で伸ばした麺類、手先は器用な動作動きをする。

テノナケ……手の中に握り込む、手のひらに包み込む、手中に。  
テノモチ……手元にある各種の物、大事な資料、自分の持ち物。  
テノクボン……手のひらのくぼみ、手のひらを縮めると文様が。  
テノゴイベツピン……手拭いを被ると美人に早変わり、似合う。  
テノゴユ……手拭いを取って、すぐ役立つ便利な生活用品。  
テノワキャ……手の回りは、手の左右前後は、手の側は。  
テノモン……任せておいて、それから万事了解、よいから。  
テバロー……手出しで、まかせて心配しなくてよいから。  
テバユウ……手早いのが取り柄、早いがお得、早くて性格で。  
テハッチョウ……手仕事なら何でも、任せて手ですることは。

テバノ……手で鼻をかむ、昔は多かった生活、素朴な風習。  
テバノウヤ……勧められてもなかなか、馴染まないと難しい。  
テハバヒリーノ……手の幅がひろいので、大量にすくいあげる。  
テバカリ……手で計って見当がつく、感触でほほ解る。  
デバリンハリ……出る時は針は使わぬ、忘れた針が残っていて。  
テハジミ……そろそろはじめましょう、まずはじめはこれなら。  
デバモベンリイイ……すいかを食べるには、でも上品にね。  
デバリヤワリー……慌てて着替えて針で怪我、慎重に扱う事。  
デバデントキニャ……歯がでていと食いちぎりは、重宝な時。



て デビヨリャモウケ……陽が出れば儲けで、天気なって仕事が。  
テビーアル……こちらにあるから、手前の方でやりくりする。  
テビンシゴツ……こちらの仕事で都合つく、工面のできる仕事。  
テビー……自分の方で都合ができる範囲の、人を宛にせずとも。  
テビッターレ……手に甘やかして、手を甘やかして使いながら。  
テビラ……何も持たずに行く、来客はみやげは持参しないが。  
テビユー……うまい具合に都合ができて、手の内で都合がつく。  
テビイリ……竹製の籠に入れて、入れ物が待っているの。  
テヒジイ……手が疲れるような仕事に、厳しい仕打ちにあって。  
テビラビユ……何も持たないままに、用なしのような格好で。

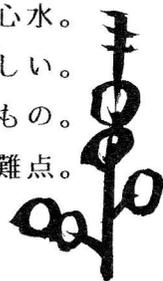
テブジン……手でできる補修など。簡単にできる修理仕事。  
テブタ……手で蓋をする、肝心な場所に手を当てて蓋を。  
テブチン……おでこが大きな、少し出過ぎたおでこ、頭が大。  
テブラデン……何も持たなくても来るだけで、顔を見ただけで。  
テブラジ……何も持たないが顔見せだけでも安心、心の問題。  
テブラビユー……手ぶらが通りの素直な性格、気持ちは通じる。  
テブラジャキ……手ぶらでも思いは通じる、見せかけでなく。  
テブラキヤク……みやげはないけれど元気なら、何はなくとも。  
テブモチキー……物入れの籠を、籠があるので早く、大物収穫。  
テブツキユ……竹製の魚とり道具を川底に入れて、大漁の夢も。

テブラ……何も持たない祭り客、みやげは高いものになる事も。  
テブラブウ……手ぶらが似合う人もある、高いお返しよりまし。  
テブラボウ……手ぶらだから安心、もらった代償は大きいから。  
テベントヒヤク……弁当持参の賃仕事、実費をもらう労働。  
デベソジ……へその出た体質、へそは大事な宝物、へそこそ命。  
デベ……一番終わりに来た、最後の人、走りは遅いが心は早い。  
デベソンコマル……少し変でも可愛い宝物、生まれる前の命。  
テボリ……手をつかって掘進む、手が性格に仕事を完成する。  
テボンてが……盆の代わりに役立つ、盆を捜すまに客に出す。

て テボメン……自分のものをほめる、それこそ本人が言うから。  
テマジ………手数がかかるが、手まで使って、加勢までして。  
テマリコ………あじさい、花の名前、雨が似合う季節の花。  
テマミリュ………手が汚れてしまって、手を汚さないように。  
テマヒモ………時間をかけても早く、念入りにすればよいが。  
テマガイ………加勢しあって仕事を進める、交替に加勢して。  
テマシ………手が増えて助かる、加勢が多くなって、動員した。  
テマンカカル………手をとるので難儀、面倒だが早く解決を。  
テマンジョウ………手をとるけれど出来た、念入りなら長持ち。  
テマデン………手間であっても、念入りにしておけば、手間暇。

テマゴーチ………助け合って、世話になりながら加勢して。  
テマメジ………手先が器用で成果がよい、入念な性格だから。  
テマワシ………取り組みが早いので、機転がきくので勝負が早い。  
テママ………てのままに自由に、自由にさせてこそ早いもの。  
テマツクロイ………暇暇に補修する、余暇に修理すれば無駄なし。  
テマジヤニ………手をとるようだが結果は有利、知恵比べが肝心。  
テマグレ………手間加勢はしておくもの、加勢にはお返しがある。  
テマンカカル………手をとるけれど結果は、念入りは無駄がない。  
テマナラ…………手間だけれど特に、入念は結果がよいから。  
テマンジョー………手を取るわりには、利口に作戦をすれば。

テマウシナイ………余分な回り道をする、慎重にしないと無駄が。  
テミーン………手で選別する農具が有効、使い勝手が成果にも。  
テミユミセンゴツ………手の内わ見せないよう、内緒は隠して。  
テミユミスナ………手の内は内緒に、思わぬ盗みが入るから。  
テミーミスル………手の内見せて株切り取られる、内緒は隠して。  
テミズ………餅つきの湿気水、愛の手水は出来の良否に、肝心水。  
テミダ…………餅つき水は仕上がりの良否に、加減が難しい。  
テミズドマ…………取り水は出来を左右する、技術がいるもの。  
テミズン………取り水の加減で美しい仕上がりに、加減が難点。



て テムコウテン…立ち向かって、相手にしても、話にならん。  
テムコウタラ…立ち向かったとしても、相手にはふそくで。  
テムクトモウカル…でむいたなら利潤が、先手が価値に。  
テムキヤトク…出向けばその分得になる、こちらから攻めて。  
テムドマ…あなたたちは、あなたたちには、先方に対決。  
テムミセン…手の内は見せずに、相手の意志を探り出す。  
テムナンカ…あなたたちなどは、相手には高飛車に。  
テムドン…あなたたちには、なんでも迎えられる。  
テムダチャ…あなたたちは、相手には格好の、なにようで。  
テムラワ…お前たちは、あなたたちはなにようですか。

テムガン…あなたのものでは、私のものではないので。  
テムード…あなたたちは、用事ならききましょう。  
テムカタ…あなたの家は、あなたの住まいは、どちらの人で。  
テムトル…手間を取らせてすまないが、お待たせしました。  
テムアゴモ…手も足も何も出せない、相手の圧力はすごい。  
テムタイイカ…手元はよいのですか、準備は大丈夫。  
テムデン…とても手もだせない、相手の守りは固くて。  
テムトンモウケ…手元の計算で利潤が、即算が役立つ商売。  
テムトラセン…手間はとらせないので、少しの時間をたのむ。  
テムツミヨ…手元油断、手元を見極めて、てもとが左右する。

テムヤラン…手を取りつけておくと、支えてやれば効果も。  
テムトガオモ…手元に重点を、手元がしっかりなら。  
テムトル…手間をとっても有効なら、手間も儲けの内に。  
テムトジ…手元で計算して、儲けをあせると損が見えぬ。  
テムツケラレン…どうにもならぬ醜態、最初が肝心で。  
テヤシボ…てがすぐ癖になって飲み食い、急所が露見した。  
テヤラコス…てがあれば百人力、手は満濃器具、有効利用を。  
テヤオ…お手柔らかに、上品は恥も隠す、見かけも大事。  
テヤエ…怖い存在の手先、揉み手が英知と謎を秘めている。



て テラセン……お寺まいりのお賽銭、集まり会費、出し合い費。  
テラニャイイ…照らなければようが、暑い日が続く、猛暑で。  
テラサルル………照明にあてられて、まともにライトが。  
テランデン……出なくても、届だけしておけば、代わりでも。  
テラスネキカル………照らした側から、照らして明るいのに。  
テラニャ……照らないほうがよい時もある、天気を待つ日も。  
テラリュウカ……照られるだろうか、照ってくれたら助かる。  
テラカルサト………寺から里に支援が、思わぬ助け船も。  
テリデンチ…照りだしたらと、照る予想だが、照れば助かる。  
テリツクル……照り方がひどいので暑い、猛暑に悩まされる。

テリクウジ……太陽が傾いて陽が入る、日ざしが部屋に入る。  
テリヨルキ………照っているので乾きが、太陽のお陰で乾く。  
テリアゲチ………照る日が続くので、天気続きも応える。  
テリカヤス………照った反射が蒸し暑く、日ざしが厳しく。  
テリデータ………照り出して暑さが、照るだけでない効果も。  
テリダス……照りはじめて、天気が回復した、当分続きそう。  
テルモイイ…照るのもよい、天気が助かる、生物には天気が。  
テルルリャ………照ってくれるなら、照るのを待っていた。  
テルバツカリ…天気が続いて被害も、天気続きに飽く場合も。  
テルカンシレン……照るかも知れない、天気になれば助かる。

テルトキャ………照る場合は、照ってくれたら干し物を。  
デル………出ますよ、でそうだから、でるかもしれないよう。  
デルド………でるから準備を、でると決まったので、でます。  
デルカンシレン……出るかもしれないので、出ると思うので。  
デルチイヨル……出ると言っているのに、でる合図があった。  
テレンパレン………だらしない生活態度、きまりのない有様。  
デレンジ……出られなくて、参加ができなくて、欠席します。  
デレタン………出られましたか、なんとか工面がついたので。  
デレトモ………出たのはよいが、出なさいとは言わないが。

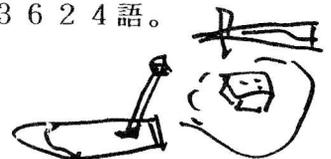
67

て デレメーヤンナ……でられないじゃろうお前は、行けまい。  
テルクセ…気恥ずかしい、内気心が邪魔する、人みずする。  
テレナリ………心情が幼稚なりにも、気後れな行動が。  
デレット………だらしのない風体、見かけが悪い態度。  
デレデレ………格好がつかない行動、物足りない風格。  
テレシ Chol……物足りない行動に、人並みに外れた風体。  
テレナリン……異常な行動に疑問も残る、風体が気になる。  
テレ………多少の行動疑問が残る風体、気になる行動が不安。  
テレント………物足りない格好に案が、不安な行動に心配。  
テレジヤキ…気が効かないので、物怖じしない風体に不安。

テントハル………下着から盛りあがって。元気に勃起して。  
テンツクマイ…賑やかなお囃子に舞う、祭り神楽が楽しい。  
テンショムショ…無理やりな行動、旺盛な動きが目につく。  
テンジョハリカユ…理髪に行く、散髪に行きたい、調髪に。  
テンカルサズカル………思わぬご褒美の幸運、予期せぬ幸運。  
テンデバラバラ………散々の行動風体、賑やかな動きが。  
テンコバル………文句なしの張り出し人気、予想外な出来事。  
デロードチ………出たいと無理している、出たい一心で行動。  
デロウモンナラ…でたならば大変と大事と一緒に、大騒ぎ。  
デローチイウニ………出たいと言うのに、でたら大変なのに。

ここまでで『て』の行…『ん』まで辿りつきました。方言を  
ふりわけて その心を分析すると 予想以上の意味があったり  
納得ゆく思いが こめられたりも しています。先人た  
ちが長い歴史の中で 日常生活用語として つかった方言は  
いろんな形で 継承され今も 生きて使われています。

だから これからも大切に使う 責任と意義があると 思い  
調査した分はそのまま 記録として使わなくても 保存して  
後世に残したいと 取り組んでいます。合計23624語。



と ドーシュモ……どうもならず、どうも工面がつかないもので。  
トート……ついに来たか、ここまで来てしまった、終わりに。  
ドーヨ……生活経済が、必要経費がまして、収支のバランス。  
ドーキ………大きな鼓動が、急激に高鳴りが、興奮して怖い。  
ドーデン………どうしても、どうやら来るところまで来たか。  
ドーシュカ………どうしたものかと、思案するけれど、判断に。  
ドーミテン………どこから見ても、どう判断しても、結論は。  
ドークル………騒ぎ立てて賑やかに、騒動するあまりに終始が。  
ドーカノ………どうでしょうか、どうしたものかと、いかがに。  
ドーコ………鉄製の湯沸かし道具、竈に付帯した湯沸かし道具。

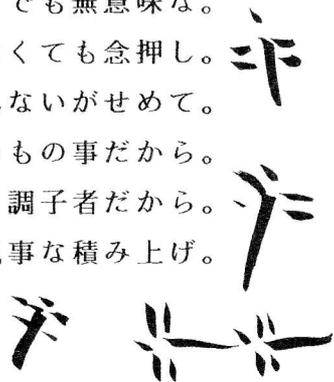
トイタ…木製雨戸の利用方法、物干しや運搬にも利用できる。  
トイモ…甘藷の別名、から芋とも、戦時中では代用食の横綱。  
トイナ………遠い事だけれど、遠くでも行きます、遠くて近い。  
トイモアメ………甘藷を煮詰めて作る飴、芋飴とも言う。  
トイニ…………遠いのによくまゝ、遠いけれど懐かしいから。  
トイシャ………砥石は、砥石は便利な、欠かせない生活道具。  
トイロ………遠いでしょう、遠かったのでは、苦にならぬ距離。  
ドイタンナ………外してくれたの、のけてくれたよう、外した。  
ドイテン…………どうしてもと言うので、じゃまだろうから。  
トイノジ…遠いので、とおいけれど用事があって、間にある。

トイーシャ………遠くのひとたちは、遠方の皆さんは早めに。  
トイナラ…………遠いようなら、遠くの皆さんはお帰りを。  
ドイチョクレ………邪魔だからのいて、そこじゃ邪魔ですから。  
トイチコ…遠くの人や近所の人たちも、あちこちの人たちが。  
トイケリヤ…………遠いようなら早めに、遅くならぬように。  
トイチュテン………遠いと言ってもまだ早いから、まだいいよ。  
トイデン…遠くであってもゆっくりして、慌てなくてもよい。  
トイナァ…………遠いことですね、暫く歩いてやっと着いた。  
トインカ…………遠いのですか、便利が悪いよう、不便ですね。

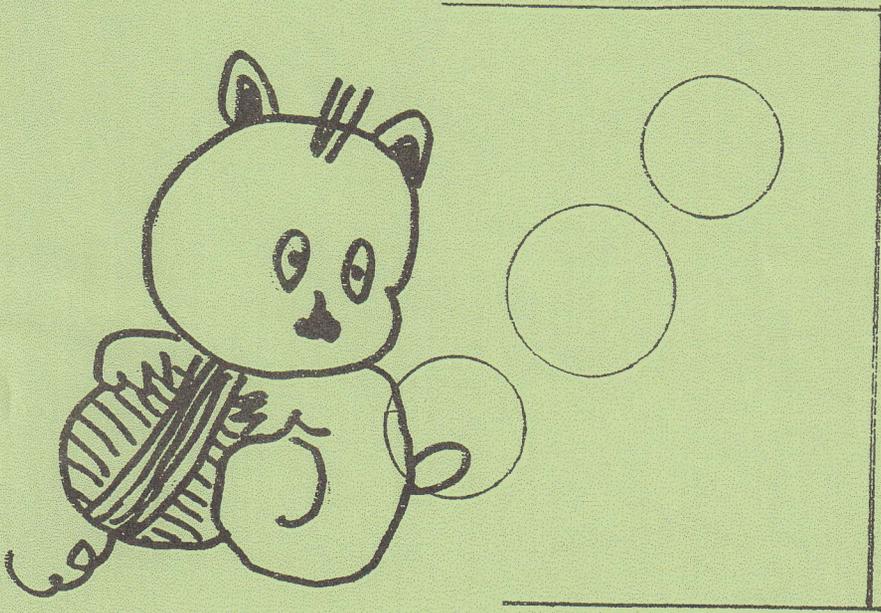
と トウテン………とてもじゃないが、どうしても無理じゃない。  
ドウカ………どうしても、どんな事があっても、なにとと。  
トウチミヨ………問いながらくわしく、質問して見ることに。  
ドウクル…騒ぎ立てて賑やかに、大声で笑いながら楽しそう。  
トウテン………とても無理では、とてもとても信じられないが。  
トウメニヤ………遠くからの眺めでは、遠方からの眺めはよい。  
トウセンバリ………通るのを邪魔する、子供が通るのに邪魔を。  
トウラ…………俵、俵の山が出来て、実りがよいのか俵の山。  
ドウショカ………どしましょうか、どしたらよいのか、思案が。  
トウス…我の張合う、通す、水を流す、風が通る窓をあけて。

トウキニャ………時には顔見せて、たまには遊びにどうぞ。  
トウジンボシ………小魚の干したもの、小魚の目針金通し干す。  
トウテンムリジヤ………とても無理ですから、無理は困難です。  
ドウシユモ………どうにもならぬ有様、困惑したままに困難。  
ドーナロウト………どうなっても仕方ない、あなた任せに。  
ドウデン…………どうでも行くなら、どうでも休むようなら。  
ドウショモ…どうにもならぬままに、仕方ない時代になって。  
ドーナロウト…………どんなになっても、後はどうにでも。  
ドウ…………どうですか、どうしたのです、こっちにやって見よ。  
ドウシチ…………どうしてどうして、とても任せられないから。

トエンゴツ………理屈が通らない、言うても通じない異国者。  
トエニャ…………問えないむなしさ、言う程あきれてしまう。  
ドエロウ…………とてもとても大変で、あきれて物が言えない。  
トエンジ…………とわれないからもう諦め、言うでも無意味な。  
トエデン…十重にしてでもしっかりと、問えなくても念押し。  
トエレリヤ…………問えるならば、無理かも知れないがせめて。  
トオリブチヨ…………いつもの意見発言、いつもの事だから。  
トオシ…いつもかつも、いつもの調子がでた、調子者だから。  
トオラ…………俵、俵が積みあげられて、俵の見事な積み上げ。



# 女性の底力



## 里を花で美しく飾りたい

そげな思いが潜在しちよつたき 暇暇に家ん回りかる とうとう  
地域ん道路まじ広がった 季節ん花道路。通る人たちがハジメンウ  
チャ 物好きち言うしもあった。が人間の願い思いは 継続ん二字  
が入ると底力も加わる。季節ごとん花がチットズツ 入れ替わり中  
にゃ いつもそこじ見らるる 指定席もあった。

根気がいるなゝもう 通り越しち『ゆうまゝ』に 変わっち行く  
人ん真心が いつんなかめーか 延びながら地区ん 幹線道路んオ  
オカタゼンブに ツナガッチシモウタ。時折バスじ通るシドウガ  
『イツ通ってん花が美しい』ち 称賛するごつ いろんな花が続き  
に見らるる 地区内ん一本道。

暑い夏も寒い冬も イツンナカメーに 手入れするんか 植え変  
ゆるんな 見ることもあるが 苗を育てたり そりゃまゝネンジュ  
ニナリャ オオゴトジャ。始めんうちゃー ワヤクするしもアッチ  
引っこニーダリモサレタ。ヨソかる来たしが ほしそうに チョ  
イト 失敬するんもあった。が ソンシモ花が好きじゃろう。

肥料やるときにゃ、『おおきに またユウ咲いてな』 心じ念じ  
拜む思いじ パラパラ肥料をヤルト ヒトアメあとにゃ 背伸びし  
ちよるごたる。正直なもんじ 『うっとう嬉しゆなるんで』 ひか  
えめに話す心ん中じゃ 『あと何年続けらるるか』 続けられた  
今ん心の幸せ 喜びがち オモイカエスと 未練がましいが。

日に2, 3回んバスが 今日もこん道路を あえぎながら 上る  
と花好きな お客さんが得意顔に 『ほら見よ ここで花が連なっ  
ち 植えちゃるところ』 まるでバスガイドんごつ 乗り合わせた  
人たちに 案内しちくれた。素朴な語りじあってん 優しい思いや  
りも 植えた人に感謝ん 思いからか。嬉しい時の間ドラマ。

イツジャツタカ 風邪ひいたんか 姿がみえんもんじゃき 近所んしが心配しち 寄ると水やりう気にしよる 『心配しなんなやっちょくわい』 2, 3人が集まっち 一斉に水やりしたき それも一掃された。夏ん草が元気だす頃にゃ 家ん近くんしも草うヒッコヌク加勢 思い合う心は 日ごろんこん**ひとん**努力に近所んしも 感謝しちよるきこす。

『生きがいに』ち言う そんな気持ちも大事に みんなもそっと見守ってちゆく 思いやりん心くばりが ここまでこん人ん真心う 守りそだてちあげたんじゃろう。言うは簡単じゃが 実行ちなると そりゃもうオオゴト。でんコツコツと 続けて来たそん執念底力は 大したもんでんあろう。

車が疾走しちふと 気がちーたんか止まった。ガラスゴシニじっと見よったが 下車すると構えたカメラ きっとイイ被写体が あったんか 満足げに シヤガミクウジ そんな花にそっと鼻を寄せた。かぐわしいそんな匂い ヨッポズ満足したんか 暫くじっと見ちよつたが もいっぺんシヤガミクウダ。

朝日に露が光ると そんな影にイジラシイ 花が清楚に咲いちよる。人がそっと始めた 奉仕活動が 趣味と抱き合わせち 長い道路の脇を そっと飾って 道行く人たちん 心を癒し慰めちくるる時間は 今日も流れているが 受けた印象ん喜ぶ時間は瞬間でん 人ん心に強く残るもん。人ん心の優しさが。

8 誰が植えたか 素朴な花に 蜜を求めて蜂も飛ぶ ハ 七瀬  
の せせらぎ サラサラサラサラ ホイホイホイ 8

ドコカルカ馬子唄が聞こえた みるとなんと 年を感じさせんごつ サカシイ 近所ん オジイチャン ねじ鉢巻きが ゆう似合う ニコット笑顔が また千両……。



## だてに年は取らない万年暦

夕立雨がネンジュ降る 折角機嫌ゆうアスージョルニ 雨んガキガフルキもう ぶずぶず言いながら 軒先に飛びくうだ。奥かる腰ヵカガメチ 出てきたバアサン 『ソゲー文句言うてんイイカ』『言いてーわなもう』『こん前は 雨どま降りゃいいにち言いヨッタンナ 誰れじゃつたかのう』『あん時ぁ雨が ホシカッタキジャコト』

ジャロウ そげ一都合いいことぁ 世の中イカンゴツ なっちよるんじゃ。雷が鳴りでーた。遊びよった子どもが 帰っち来た。『お前どう 早ヵあがらにゃ ヘソ取らるど』『なにえヘソダレガとるんな』『や 雷さまがど』『そげな……』 子どもたち 大笑いしよる。

バアサンモ 本当は腹たてち ヤカマシュ言う ところじゃが 相手が子ども そこじ怒ってんシカタネエキ 『あんのう 夕立が降ると 気温が下がっち オナカを壊さんごつ 気をつけにゃち言う 戒めん教えじゃど』 昔ん絵にある雷が 虎んフンドシじ雲ん上かる ジョウロじ水撒きよった。

バアサンな物知り 里んしゃ『万年暦』ち言う。 なんでんユウ知っちよる。夏にゃゆう夕立が あっち子どもたちが 外じ遊びよると アタダ光っち 間もねえグワラグワラ ピカピカ と鳴ったりひかったり イチドキニアッタ。もんじゃき ままごと遊びん子どもたちぁ ゴザを引っぱり よすると カベナシに飛び込みよった。

セワシュ出ちきた バアサンガ 言うんがこれじゃつた。ヘソハ今こす用事がねえが 生まるる前まじゃ オカチャンガン 腹ん中じゃここかる 『食べ物ヵもらいよったんど』

『そげな話しゃ聞いたわな』 じゃろうコン子は もう5年生  
んどたる。『そしちの 蚊帳ん中にエ ヘーチ 桑原桑原ち言う  
と 雷さまは ここにゃ来んのと』『えーなしな』『蚊帳は電氣  
が通りニキーし 桑原は昔 雷様ん子供が 落ちたら助けちくれ  
た 所が桑原ち言う 所じゃつたき 桑原にゃ落ちんのと』

バアサンの話に 引きこまれた 子どもたちは 素直に言うこ  
つう聞いて あがらせちモラウト ザシキジおとなしゅ しちょ  
つた。『桑原ちゃどこな』『桑原はのう 遠い国じゃき 飛行機  
も船もいかれんき コラエニャノウ』『エーナンカ あやしいの  
う』 座敷は大笑いになった。

こん頃は雷が落ちる そげん話もゆう聞く。それじ怪我したり  
運悪く 亡くなったしもある。雷がなりだしたら おおきな建物  
ん中に 『避難することじゃの』 大きな木のそばやら 金物ん  
側はあぶねえき 気をつけにゃのう。雷が太鼓叩きだしたら 早  
目に避難しち 静まるまじ待つことど。

雷といつしよに こんだ雨もふるこちなるき これも用心せん  
と ダマシ増えちひごろら チットシカ流れよらん 井路やら川  
でん すぐ増えちくるき 近づかんことじゃの。『俺はショワネ  
エナンカ イウチャどうくりよると 雷よりオジイコチナル。雨  
かやむまじ 昼寝しちよきゃいい。

バアサンの話しゅう聞くと ちった落ち着いたんか 横になっ  
ちよつた子ともも 眠ったごたる。まゝふんと正直な子どもじゃ  
バアサンも 嬉しかったごたる。素直じ正直じゃき 親もやっ  
ぱゆう 育てちよるち安心した。どうやら雷は おさまったか  
雷も 昼寝したんか バアチャンも忙しい事じゃが。



★ 女性ん底力ん方言説明

- 77P チットズツ…少しずつ。ゆうまゝ…よくまゝ。オオカタゼンブに…ほしんど全部に。シドウガ…ひとたちが。イツンナカメーカ…いつの間にか。ワヤク…いたずら。ニーダリモ…抜いたりも。ソンシモ…その人も。ヒトアメ…いっかい雨が。
- 78P イツジャツタカ…いつでしたか。やっちょくれ…やっってください《この場合は水をやておくから》。シャガミクウジ…かがみこんで。サカシイ…元気で。
- 79P ネンジューいつも。アスージョル…遊んでいる。ガキガフルキ…この場合は雨が降るので。ソゲー…そんなに。ヨットンカ…言っていたのですか。キジャコト…この場合はほしいので。ジャロ…でしょう。ヤカマシュウ…うるさく 大声で。シカタネエキ…だめなので。アタダ…急に。ゴザ…七島いで織った畳表。カベナイ…大きな家の軒先。オカチャン…母親。
- 80P ヘーチ…入って。ニキーシ…憎いので。コラエニャ…我慢せねばなるまい。エーナンカ…ほんとですか。チットシカ…少しですか。ショワネーナンカ…世話はないなどは。イウチャ…言っは。

鹿子ゆりのように優しい心

社会福祉協議会ん奉仕活動に 毎日熱心に取り組みよるが 家  
にゃ木陰ん崖に足れ水が 滲み出よっちソンチットん水に めえ  
とし美しい鹿子ゆりが咲きよつた。こん人ん優しい心が出ちよる  
ごつ 素朴な花じゃが清楚に 眺むるとニコット微笑むごたる。  
『もう今年も鹿子ゆりが咲いたんで……』

季節ん便りも書き送る中に いつも手書きん絵も あっち家じ養生しよる人たちにゃ どんくれ心が和む事か。受け取っん返事が書けんき ハゲラシインジャガ 解ちちくるるそれが又 本当に『すまんこつじゃ』ち 訪問すりゃ手を握り そん手の上にポトリ暖かな 涙が落ちる。

坂道をものともセンジ 自転車をせりあげち 通う姿にゃ健康なモンニャ サホドンこた一浮かばんが 不自由になった人は『こん暑いに 自転車に乗ち 来ちくるる』ち 想像する時は観音様んごたるち言う。そう言ゃ家ん側に 観音様う祀った奥の院もある。

そん山ん岩を伝う清水が 民家ん飲み水になったり 鹿子ゆりん命を守ちちも くれちよるんじゃろう。人間な世話になったり世話を させちもらうたりが 生きちよる証じゃこと。誰も好きじ病気あせんので じゃき世話させちもらうと こんだ自分か病気した時にゃ 誰か診ちくりゅうじゃろうき。

心が豊かじゃき誰にでも 愛想ゆう接しちくるるんも 人生ん得人かん知れんごたる。古い歴史の家を守りながら そげな歴史はおくびにも出さんじ 奉仕活動かる地域ん いいバアサンでんあり 88ヶ所巡りん白衣も ゆう似合う。神仏とん関わりやら人を 大事に守ってあぐる仕事は こん人らしい仕事。

『鹿子ゆりをもっと広めたら』ち ゆう言はるるが それが他所に移してん枯るるごたる。やっぱここじこす育ち 咲きてえんじゃろうな。やっぱここに来ち眺め 優雅清楚さにふるるんが一番 いいんじゃろうな。時折手折った花を 持参しちよるがどしてん無理なシニ おもてなしん持参じゃろう。それが又最大の世話に 結びつくんじゃろう。自然の中に人間も生かされちよる。自然こす大事に。



## 踊り伝える心意気 直入文化今も

昔かる直入文化が根強かった ここじゃ優雅もあり質素儉約も絵に ケータゴツ残っちよる。そげな中じ盆踊りも 楽しみなひとつじやつた。じゃが戦争があっちイットキ途絶えちよつたぬ心意気あるしたちが 『年寄りしも喜ぶで』ち 堀り起こしち口説きじ 踊り始めた。

盆の16日オバンカテ行ったら ナスビきりかけ フローん煮しめ…ソレエヤソレエヤ ヤトヤンソレサ…囃子口説きが流れち向こう岸ん 直入まじ聞こえたもんじゃき 若いしたちがヤッチ来る。いつんなかめ一か 踊りん輪にへールト 昼んダッタノン忘れち踊りん 輪がひろがった。

昼間ん仕事着たぁ チット違うごたる 浴衣ん布ずれが 素朴な片田舎んツボサキじ 繰り広げられち 静かに更け行く憩いん一時。

『もう何年振りかな』 年寄りたちが お接待ん茶に ヘギに盛られたヤセウマ ダンゴ』が 人ん心う表しちくるる。若い嫁さんたちも こげな雰囲気溶けくうじ 片田舎ん珍しい 盆の習わしに酔いしるる。長年続いた踊りが 戦争やら戦後ん 騒乱かるやめちよつた それが今蘇るのにゃ 情愛がありゃこす。

いつんなかめ一か 年寄りしもそん輪に へーち踊りよるぬ見ると『やっぱ盆踊りにゃ 哀愁はあるが どこか心が癒さるるごたる』ち 耳元じシャベリヨルんも 懐かしいけんじゃろうか。今年も又寒い冬が来るが こん冬もサカシュウシチ らいしんの花見酒う 若い婦人会んしに招待しち もらいて一もんじゃ。

一夜恋した盆踊りの輪 あしたからは 取り入れ準備になるが『又イッショニ踊ろうえな』ち 名残り惜しい風情。

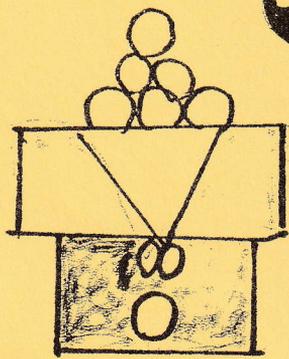
語り継がれた盆踊りん 口説きがなんぼもあっち そりゅう  
婦人会んしも ぐあいゆううけつじ 毎年新しい歌が入れちゃ  
るぬ みてんここん人たちん 熱心さが受け取れる。古い文化  
を敷台にした 香り高え文化ん 流れはやっぱそこに 住む人  
ん真心ん世話が 底力がありゃこす 育ち受け継がれもする。

### ほうげん説明

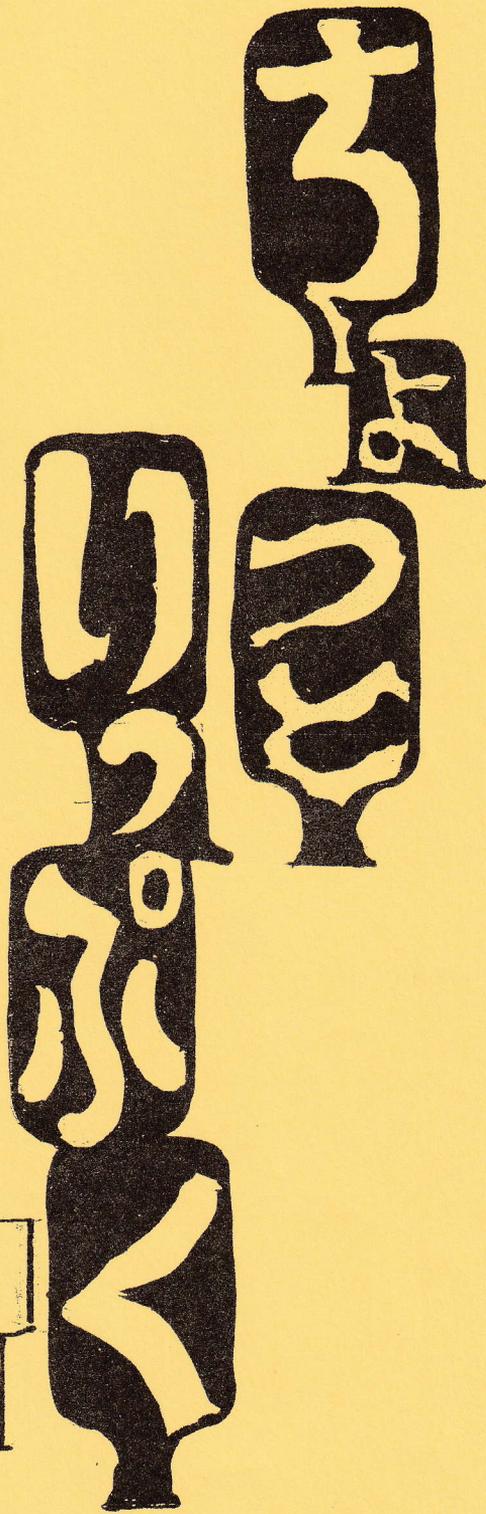
- 8 1 P ソンチョツト…その少し。めえとし…毎年。咲いたんで  
…咲きましたよ。
- 8 2 P どんくれ…どのくらい。バゲラシインジャガ…悔しくて  
。センジ…しなくて。サホドン…どれほどにも。こんだ  
…つぎは。そげな…そんな。ごたる…ようで。やっぱ…  
やはり。シニ…人に。
- 8 3 P ここじゃ…ここでは。ケータゴツ…書いたように。イッ  
トキ…しばらく。オバンカテ…お婆の家に。フロー…畦  
豆の一種。ヤッチ…やってきます。なかめーか…なかま  
にか。ヘルト…入ると。ダッタノン…疲れたのもつい  
。チット…少し。ツボサキ…農家の庭先。ヘギ…木製の  
四角い盆。ヤメチョツタ…休んでいたが。ありゃーこす  
…あればこそ。やっぱ…やはり。シャベリヨル…話して  
いる。サカシュシチ…元気でいて。らいしん…来年の春  
には。もらいてーもんじゃ…お招きしてほしい欲望。  
一夜恋した…一休みした、束の間の淡い恋でも。踊ろう  
えな…踊りましょうえ。

野津原地区は 旧野津原、諏訪、今市、直入、大野、などの  
地区が合併によって 出来たもので 江戸期では 肥後、岡、  
天領、なども時代の流れの中で 寄り添いながら 今日が形成  
されている。巡り会わせた人たちによって 今日の歴史が絆と  
なっているのです。





M



今から46年前《昭和46年頃》米価は8631円《1俵》  
しよったが 当時ん90歳以上ん7人 男子2人、女子5人じゃ  
った。常に女性が長生きしよる。そんな頃に作詞した農家ん唄。

8 産業生産今は夢 日々の支出に追われつつ 今の社会も楽じ  
ゃない 現金収入に支えられ 今日も暮れ行く故郷で 過ぎ  
し明治に憧れる。

1俵増産かけ声も 今は減反調整と 迷い続ける農の道 移  
り変わる激しさを 六十路越えて今も尚 行くよこの道果て  
るまで。

当時ん精農家でん 1俵増産まじゃ『やるで』ち ねじ鉢巻き  
姿じ腰に 薄鎌うさすと 『いいどー』 向こうかる声がかかる  
そげな 場面が懐かしかった。『チュウレンヌ 言わんじ ヤン  
もチーチコンカ 草ん1駄ぐりゃー 切っち加勢するど。威勢が  
いいき つりこまれち ついち行くモンジャキ 家んしゃ朝かる  
『どき行ったんか』ち 捜しゃせんけんど 『マメシチョコケ』で  
事足りよった。

こん年に地域集団電話が 開通した。中央公民館も会館。老齡  
年金第1号ん 上石合ん人が受給。65歳以上んしたちん 国民  
年金も6、7月分5000円が 今市局じあったそうな。

七瀬河河川敷に河川プールが完成 幼稚園児120人が 招待  
されち水遊びう楽しんだ。

47年1月ん長寿者を見ると《1972》 91歳が3人《女  
性2人》 89歳が4人《女性が3人》と 常に女性ん健康体質  
が 浮き彫りされち 底力があるんが う伺えよった。今かる4  
5年はず前ん ことじゃけんど。

まちっと ヘモドッチみろうか 昭和44年《1969》今かる48年前じ そんなにゃ米価も8218円じゃった。

森林航空防除が始まったんが こん年。練ヶ迫林業研究グループ結成。大分じゃ学園紛争が表面化。大分石油コンビナート1期工事完成。人類はじめち月面に立つ。富士鉄《現新日鉄》ん大分製油所起工式。なんかがはじまった 農村でん農業利用が 営農と健康とんバランスが 苦慮するごつなった。

労力配分のアイデアも 進歩する中じ生活ん 環境もちっとずつ変化する 発展の息吹きもひしひしと。長生きが自然と定着 国民年金のありがたさも 浸透しつつあるごたる。健康じ長生きがなによりじゃが 高齢化になると 自然と自由な時間が増えて 体調ん管理が問題に なりそうでんある。

米ん減反な45年かる 急速に変わりはじめち 機械化された農村の収支バランスが 壊れかかち来た。どしてん生活基盤ぬ維持するにゃ 現金収入がせかるる。おいおいと季節労務にも留守番のおらん家じゃ 悩みも加わるごつもなった。ダム建設ん話が盛り上がったんも こげな季節でんあった。

町営住宅が出来始め 人口がチット増えそんな 機運が高まったが 減反と言う大きな壁は 潜り抜ける手立てが 行きつまるありさまに悩む。昭和44年かる始まった 自主流通米も減反の奨励が 矛盾もしち農家ん悩み ここに来ち最悪にも。作りたいが減反がのしかかり 自主流通米は素人じゃ 売りさばきに苦勞しよったごたる。

47年に田中内閣になっち 米値は9030円になった。48年、年にゃもう9030円。48年にゃ10390円になった。それだけ農家は機械代 農業 肥料に追われち。



## 教えてほしいあの事

俄か雨じ小走りに飛びくうだ 辻の地藏堂じゃつたが 偶然にもそき一馬子ん五助さんが 一足先に雨宿りしちよつた。『あら五助さんも雨宿りな』『お前こすなんじ ここに飛びくうじ来たんか 若えもんが濡れち 風邪うひくど』おなじ一言でん相手を思う 優しさがこめられち じゃき何でん相談もしよつた。

『そうそう こん前んあれ いつか教えちくるる』『あれかそげーシタカリャいいが 若えき無理もねえがのう』よつぼずんこつー頼んだんか。年頃でんあるき 知っちょきてーな ゆう解るが用件じゃ 誰でんいいち言う訳にゃ いかん事もあるき。『よつぼずシテーンじゃのう』『……』

母親は遠方かる親が工事請負じ 来ちよつた頃に 器量よしじ手がかなう もんじゃき村ん 若いしどまん狙われ者に。たまたま急に頼み事うした 娘ん親 たつたそん事が縁じ親も許した 仲になちちいつんなかめーか 男女ん仲生まれたんがこん娘じ 仲立ちう頼まれたも 五助さんじゃつた。

がそん母親がはやり風邪が元じ 若死にしたもんじ父親も 考えたが じいさん、ばあさんもおるき そんまま娘を育つるこちなち 娘にしちみりゃ 格別な思いがあき 嫁に行くまじにゃち なんか考えちよるんじゃろう。オカチャンがおりゃ 気さくに相談するに そりゃ叶わん。

雨がえーと小降りなつたき 『ほんな今日ひまなら 帰ちちかる来るか』『ちゃー今日でんいい』『悪いけんどここじ会うたんが 運のつきじゃのう』『ありゃーそげ一言わると 頼めんな』『いまな トワズど 心配せんでんいいき 来りゃいい』『おおきに ふんな着替えちかる』

五助さんもまさか 母親んした 繰り返しゅ教えち そげな  
こたあまさか 言うんじゃあるめえち 嬉しさと不安がある  
思いも年甲斐のう 交差しよった。『着替えちまじ来るた ち  
っと穏やかじゃねえが』 若い娘がもしかしち 誰かに欲求さ  
れち 困ったき シカタオシエテ。

ほどのう着飾った娘が 『ばばさんが火焼きゅう 持って行  
きなあち 言われたき 持って来たで』 『そりゃーまあ済まん  
のう』 決まり文句んごたる 挨拶が出たき こりゃちっと  
畏まらにゃち覚悟した 五助さん 『ちよいと待ち 俺も着替  
ゆるき』

なにか慌ただしい時が 流れよるんが 家ん中う変えち行く  
ごたる。あん辻ん地藏堂かる 間もねえに異様な 空気は何を  
物語るんか。高齢者と まだうら若い娘とが どけなこつー習  
い どけな方法じ 教えるんか。まったく詳しいこつー 聞か  
ず知らされも しちょらんに。

『済みません 忙しい時間に 無理なお願いをしち でん今  
んうちに 習い覚えちよかんと そんなち あただ ショ  
ナンカ言われてん 困っち慌つると それこす 大事うつくり  
たつる 事いなるもんじゃき』 『や 何かややこしい 問題  
じゃねえんか』

『あんな 嫁にもらわれた時に いよいよ行く日に オトッ  
タンに お世話になりましたち 挨拶するじゃろう』 『なんか  
あれか』 『ちゃー 何ち思いよった』 『うんにゃーそん お前  
じゃき』 本当ん気持ちちちと ややこしにあつたぬ 恥じ  
た五助さん。

『そうか ゆう相談しちくれた オオキニ じゃ  
ねえかち考えちよつたんど』 冷汗たらりは言えんじゃつた。



※※ 方言説明

85 P 明治…1868⇒1911年代。1俵…米が60キロ入っている俵。いいど…よいです。チューレンヌ…調子のよい冗談入りの話。ヤン…お前。チーチコンカ…ついて来ないか。くりゃ…くらいは。モンジャキ…もので。マメシチョケ…そのままにしておけば。集団電話…集団で加入して1本を信号によって使い分ける。河川プール…河川敷を利用して作った簡易プール。じゃけんど…ですが。

86 P ヘモドッチ…引き返して。航空防除…ヘリコプターで一斉に防除薬剤散布。なんかが…などが。減反…植付けの制限。機械化…機会利用の農業化。現金収入を求めち…季節労務や日雇いに出る。ダム建設…現在の大分ダム計画案浮上。

87 P じゃき…ですから。そげーシタケリャ…そんなにしたいのなら。いいが…よいが。よっぽず…よほど。シテージャロウ…したいのでしょうか。オカチャン…母親。おりゃ…俺は。ほんな…それなら。今日でんいい…今日でもよいから。トワズ…冗談を。

88 P あるめーち…ないだろうから。シカタワシエテ…しかたを教えて。火焼き…コムギコナをこねて火で焼いた餅。どけなこつう…どんなことを。しちょらんに…しといたいの。あただ…急に。シヨナンカ…しなさいと。ややこしい…難しい。あんな…あのね。オトツタン…父親。うんにゃ…いいえ。オオキニ…ありがとう。

昭和48年頃《1973》にゃ 東部小学校が開校100周年ぬ迎えた式典。今市北部簡易水道施設竣工。小屋鶴住宅29戸が完成。第4次中等東戦争が 石油ショツクン引き金になった。

昭和48年ぬ チット集めち見たら 東部小学校100周年の式典 神楽ん奉納があり 演芸にゃ舞踊 民謡なんかもあった。神楽ん里が100年越したき 地域ん小型映画撮影もあっち そん脇じゃ民謡大家ん 尺八による現地撮影もあった。水しぶきんほとぼしる 滝や農家ん作業も取り知れ 小型映画フェッショナルにも 出品しち素朴なストーリーに 好評もあった。

東京からの早起き鳥で 田植機械が活動するニュースが 放送されNHK農事放送が 脚光を浴びたのんこん頃。河川プールん祝賀会じゃ 民謡なんかも飛び出しち 素人司会者がもてた。

戦後ん素人演芸会も 自然と高尚になっち 民謡教室があった事で 鳴り物入り時代に移行 片や回り舞台んごつ 定期的に来ち楽しませちくるる 劇団が連鎖劇を企画する。町内じ撮影した場面が出ると歓声 その動きの後に突然 映写に変わる早業が 人気にもなった。

農家が転機を迎えた時代になり ハウス園芸から特殊な野菜 果樹ゃ蜜柑などが仲間入り。多角形ん複合経営が 地についた農村のあり方に 経費が収入とのバランスに 厳しい選択もあったごたる。じゃがそげ言うてん 農地がありゃ止める訳にも いかんき乳牛 肥育牛 柿 なんかが注目を あびるごつなった。

大分郡一大けな米を 生産しよったもの 時代が変わっちゆくうちに 米だけじゃどうにも ならん世の中になっち きよるごたる世の中。ニラ イチゴ ワケギ ゴボウ シイタケ 茶 味噌 柿 園芸野菜 恵まれ過げた生活環境に 合わせち進むなオオゴツん 時代になりつつある。培度機、田植機、そしち畦塗機ん話も 足腰ん傷みを 訴ゆるしも多うなった。

健康なんが一番いいんじゃが なかなか難しい世の中になる。



故郷に生まれ育った § あの唄 § この曲の ひろがり。

★ 山村暮らし

みやまの奥は 水清く 朝はジョギング 身を鍛え  
木々の香りに さそわれて 昼は楽器で 手をならし  
仮の居場所に 根をおろし 午後は作詞の 種さがし  
小鳥の唄を 聞きながら 名ある古跡や 方言も  
早や五つ歳は 過ぎ去りぬ たずねて綴る 土地の唄

★ 岩清水

宇曾で生まれた 岩清水 哀れ寂しく 行く姿  
日暮れの坂を どこえ行く 川の広きを まだ知らぬ  
どことて当ては ないけれど やがて降り着く 七瀬川  
流れ行くのが 我が運命 温見。吉熊、舟平の  
別れを惜しむ 松の風 水と逢うたら 道連れに

七つの瀬音 鳥の声  
聞きつつ通る うねり川  
心に映せ 旅日記  
町の濁水 苦がかろが  
飲んで染まるな 宇曾の子じゃ。

★ 領地の民は今も尚

あらさこらさの 掛け声強く 駕籠で揺られて 疲れた殿が  
毛槍飛び交う 藩境 今宵くつろぐ 御宿に  
肥後は大国 豊後の果ての 民百姓は 心を砕き  
野津原までも 我が領地 一夜の夢に やすらぎを  
岡の藩主も お出迎え 願う想いで 伏し拝む

肥後の盛時を 偲ぼんとてか  
宿所御門を 今も尚  
残してまつる 野津原神社  
町のいらかは 変われども  
人情変わらぬ 土地の人。

★ 受賞

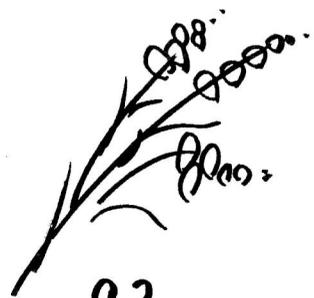
山は薄紅 うす化粧 拙き筆の 一文に  
白菊匂う 秋なかば 最優秀の 栄誉とは  
予想だになき 吉報は 心苦しく 思えども  
我が作品の 審査表 謝して受けよう 有難く  
受賞の知らせ 胸をうつ 労働基準 局長賞

初めて上がる 表彰台  
多くの視線 身に浴びて  
差し出されたる 金縁の  
額に納めし 賞状を  
おし頂けば 涙ぐむ。

★ 男の我慢

早出夜勤に 耐えながら 職場仲間に 誘われて  
三月三年 過ぎのとう 交わすお酒に 歌もでる  
あれやこれやと 教えられ 昼の休みは 輪になって  
いつかなじんだ 制服は 時の流れの 止まるほど  
仕事一途の 宝物 世間話に 花が咲く

義理と人情の 道しるべ  
越えた山坂 とおまわり  
人の値打ちは 他人が知る  
汗と涙の 勤続賞  
友よ家族よ ありがとう。





# ひ了 方言単語 がり

トオノキャコマル……遠くになると困る、なるべく近所に。  
トオカル……前から、以前から頼んだ、早くから言ったので。  
トオリャセン……通らないので、通らなくても、来ませんよ。  
トオッテン……通っても、通ったので言ったけれど、構わない。  
トオマワシ……じわって謎かけて、それとなく言う。  
ドオクリャ……冗談まじりに、おもしろおかしく話したが。  
トオリモン……雨よけにもなる門、火急なときに入る。  
トオラレン……通られないが、通ると悪いのか、勝手には。  
ドオデン……どうしてものは、無理にでもして、火急で。  
トオチコ……遠いようで近場に、すぐ間に合う距離で。

トオシイ……いつもたびたびに、日ごろから遠慮なく来て。  
トオタ……といいましたが、聞いてみると、尋ねてみたら。  
トオラ……俵、米などをいれて保管する、乾燥と湿度が保てる。  
ドオカ……どうでしょうか、それはどうか不安で。そちらに。  
ドオクンナ……冗談ではないですよ、予想外な事でびっくり。  
ドオージャツタ……どうでしたか、いかがでした、結果はどう。  
ドオシチ……どうしてまた、どうしたのでしょうか、なでに。  
ドオクンナ……おだてないで、冗談ではありませんよ。  
ドオコオ……そんな事を言われても、心外な話で答えに苦勞。  
ドオナロウト……いかになりましても、結果がどうなっても。  
ドオジニ……雑炊の材料に、あり合わせの食財で、間に合う。

と ドカンヌイキー…土管を埋めて水路に、土管が井戸ん代わり。  
ドカンキ……どかないので、移動しないと、他に変わって。  
ドカセチョケ……動かして他に移す、じゃまになるので移動。  
ドカスリヤ……のけておけば、移動すればみんなも便利。  
ドカリユウカ…移動してもよいか、移動したがみんな便利に。  
ドカンゴタリヤ……動かないなら、無理にでも動かして。  
ドカセンカ……移動させなさい、動かねば無理でも動かす。  
ドカタ……土作業をするひとたち、土木工事の人たち。  
ドカス…他に移動させる。邪魔になるので動かす。排除する。  
ドカンジャロウ…どかないだろう、無理にでも動かさないと。

ドキデンアリヤ……どこにでせもある、さほど珍しくはない。  
トキニヤシツウテ……時には湿気の補充を、適当な湿度も。  
トギセニヤ……ともだちにしておくと助かる、善友は宝物。  
トギヤオヤヨリ……友だちは親より助かる、善友は何よりも。  
トキドキデン……たまには顔を見せて、ときおりお越しを。  
トギヤタカラモン……友達はなによりの力、幸せは良き友達。  
ドキーデン……どこにでも、どににでもあるが内容が。  
トギユツレチ……友達をつれて、友達次第で花も咲く。  
トギニヤ……友達にはよくしておく、付き合いが大事な社会。  
ドギンナ……荒い言葉は使わない、儲けどころが嫌われる。

トキンマ……時の間にあのほどよい付き合い、日ごろが大事。  
トキニヤ……時には、時として思わぬ事にであうもの。  
トキー……ときどきは新陳代謝も、人のふりみて。  
トキ……時間、食事の意味、旅人の弁当、遍路のお接待。  
トギ……友達の意味、いい友達は宝物、日ごろ往生が大事。  
ドキ……時分、昼時など節目の刻み、食事時、撒き時。  
トキチーチ……解きかけたら巻きついて、解けたがからまる。  
ドキヤ……どこにですか、どんな結果が現れた、いづくに。  
トキンメニ……時の間に、瞬間的な、あっと思う刹那。



と ドクリャドゲカ……どけてはどうか、移動してもよいのでは。  
ドクミルカ……どこを見ているの、どちらを向いていますか。  
ドクレデンネエ……悪い考えをもっている、嫌われものの。  
ドクマジ…退くまでは、毒までは気がつかずに。毒物に注意。  
ドクグレーカ……退きませんから、動かないので迷惑をする。  
ドクチャ……移動しますよ、じゃまなら動きますから。  
ドクゴタリヤ…退くようにあればお利口、言うことを聞かず。  
ドクナヤタ……嫌われ者だから、人の嫌がる事を平気で。  
ドクナヤッチャ……世間の人たちに嫌われても、つまはじき。  
トクアリヤ…得があれば損もする、いいことばかりではない。

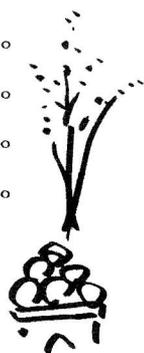
ドクシユウナ……悪者根性が抜けないので、嫌われ者で困る。  
ドクシデンネエ……箸にも銚子にもかからぬ、嫌われ者で。  
ドクデネエ……人並みな事は嫌いな性格、いつも嫌われ役で。  
ドク……のきますから座って、移動しますからここにどうぞ。  
ドケ…のきなさい、そちらに移動して、そこに座りたいから。  
ドケテンワリー……どこに行っても嫌われる、馬が逢わない。  
ドケデンシヨ……どうにでも勝手に、いいようにしたらどう。  
ドゲシタンナ……どうしたのですか、どうしましたか心配で。  
ドゲンコゲン……どうにもこにもならぬ、どうしてよいか。  
ドゲシユウカ…どうしたらよいのでしょうか、どうしたものか。

ドケンフウナ……どうゆう按配ですか、気分はいかがですか。  
ドケテンワリー……どけても悪いと思うが、移動してもよい。  
ドケナツテン……どうなってもよいですか、結果はどうでも。  
ドケチョキャ……移動したのなら、動かしてもいいかなあ。  
ドケンジョコウ……移動しないで置くことに、のけないが。  
ドケシタノ……どうしたのですか、何事かあったのですか。  
ドゲー…どうですか、どうしたものでしょうか、いかがです。  
ドケミータ……どちらを見ているの、どっち向いたんですか。  
トケメー……解けないのでは、解くのに苦労しているようで。

と ドケーユウテン…どんなに言つたところで、どんなに言うも。  
ドゲデン…どうしてでもなら、どうでもよいから。  
ドケナロウト…どんなになつても、おまかせしますので。  
ドケナツテン…どうなつても構わないので、結果はどうでも。  
ドゲシユカ…どうしましょうか、どうしたものでしょうか。  
ドゲンコゲン…どうにもならないので、始末がつかないの。  
ドゲデンイイ…どうでもよいですから、おまかせしますので。  
ドゲンシカ…どのような人でしょう、少し心配なのだが。  
ドケドケ…退いてください、邪魔はしないで、迷惑ですから。  
ドケカシチャラニヤ…どうかしてあげないと、何とかして。

ドコンココン…どこもここも大変な、大事で困るのでは。  
トコリー…所に、いい按配な所にきて、待っていましたので。  
ドコンシデン…どこの人たちでも、誰でもきたら仲間に。  
ドコヘン…どの辺の人たちかな、仲よくなってよかったね。  
ドコマジャ…どこまでがよいのか、区切りや節度も大事で。  
ドコンネキカエ…どこら当たりなのか、場所がはっきりなら。  
ドコニデン…どこにでも、珍しくはないが、親しみを感じ。  
トコリイジャ…ところにです、丁度出会って、びっくりした。  
ドコドコ…どこですか、どこの事で、見たような聞いた。  
トコリン…所の、場所の、出会ったのを思い出した。

トコナスビュ…婿養子迎えた嫁、家つきの娘さん。  
ドコンコド…この子どもかな、たしか隣の子じゃないかな。  
ドコ…どちらで、あちらの事ですか、あの事でしたの。  
ドコチュウテン…どこと言つても、はつきり解らないが。  
ドコヘラニヤ…どこ当たりの事で、あの事なら聞いたが。  
ドコラマジ…どこまでがその事で、どの人までが選手で。  
ドコンコトヤラ…どこの話なのか、いつか聞いたような。  
ドコデンイイ…どこでもよいので、どこにでも行きますから。  
ドコンココン…どこにもここにもあって、あっちこっちに。



と ドーナリャユルタカ…どんなことになろうと、なんとかなる。  
ドーデンシチャレ……どうしてもしてあげて、助けておけば。  
トーマミュアンニ……空豆を餡にする、空豆の利用は多い。  
トージキチモウ……飛んできたので、すぐ飛んでくるもので。  
ドークル……騒ぎまわる、賑やかなのか好きで、調子にのる。  
ドーデンコデン……どうしてもと言えば、出番が多いので。  
ドーネリャ……どんなように寝れば、どんなに練るのです。  
ドーミテン……どのように眺めても、見た瞬間にやはり違う。  
トーマメアン……空豆の餡が入った餅、空豆利用の餡を作る。  
ドークンナ……冗談ではないですよ、調子よく乗せられて。

ドーチイテン…どんなについても、どちらについたとしても。  
ドーニカ………なんとかうまく出来て、やっとできあがった。  
ドーモナランジ……どうにもならなくて、うまく話に乗せたが。  
ドーシュカノ………どうしたがよいのか、どうすればよいのか。  
ドーニデンナレ………どうなったとしても、結果はうまく行く。  
ドークリカエーチ………本当にもう冗談が多すぎ、騒ぎすぎる。  
ドーシュート………どのようにしようと、おまかせしますので。  
ドーシチワカルカ………どうして解るものか、少し難問だけど。  
ドーカスルンカ………どうにかするのか、どうしたがよいのか。  
ドーコシチミテン………いろいろ試したが、なるようにしか。

ドーサネエド…簡単に出来るから、任せておけば出来るから。  
ドーシタンナ………どうしたのですか、心配でしょうがまゝまゝ。  
ドーモセンニ………どうもしないのに、大丈夫だから心配ない。  
トーセンバリユ………通行の邪魔をする、通らせないと意地悪。  
トーチミレ………聞いてみたら、聞くとよくわかる、聞くこと。  
トーテンイインド………とてもよいから、よいから心配なし。  
トートユウネエ………ついに来ましたか、だめだったのですか。  
トーニオランキ………早くからいないので、見かけないから。  
トーメガミエタ……よくみえだしたので、遠方までよく見えて。

と ドサリ…ぼっと落とす、一気に落とした際の音、急に聞こえ。  
ドサクサマギリ…慌てていて流れの中での音、慌ただしい音。  
トザシチョル…しめているよう、しめ回して不在なのか。  
ドサット…急に不気味な音が、物音に驚いて、怪しげな音。  
ドザイ…だいたい、本当に予想外な、異常な行動発言に。  
ドサイノヤ…予想外にあきれたり、信じられないような。  
トザイトザイ…東西東西芝居の口上、幕あいのふれごとなど。  
トザシタンカ…閉じてしまったよう、留守にしたのかかも。  
ドサドサスル…不気味な音が響く、異常な音に不安に。  
ドシャ…急に聞こえる見える音、どしゃ降り、不気味な音。

ドシチデン…どうしても、無理にしても、急きょ変更。  
ドシタンナ…どうしたのですか、今日に何事で、吃驚した。  
トシヨリヤ…高齢者は、年配の人たちは、年老いた人。  
ドシテン…どうしても、むりやりにしなくては、急きょ。  
トシヨリ…高齢者、お年寄りの人たち、高齢になって。  
ドシチカル…どうしてですか、無理ではないですか。  
トシジャキ…年寄りですので、としですから遠慮して。  
トジタヌ…とじていたのに、とじたけれどあけて。  
ドシコモネエ…ほんの少しですが、少ししかないの。  
ドシジャ…同志でしょうから、お互い仲間ですから。

トシワケー…としが若い人たち働き盛りのたくましい。  
トジチョリヤ…とじてあれば、閉じて丈夫にしてある。  
トシュワスルル…としをうっかり忘れて、忘れぐせ。  
ドシコン…どれ程でもない、ほんの少しで、ちよつとで。  
ドシテン…どうしても、これだけは、どうあっても。  
ドスドス…不気味な物音、油断がならぬ物音、用心しないと。  
ドスゴエ…凄みのある声、用心したがよい相手のような。  
ドスクロウジ…真剣に黒くて、色素が黒いので。  
ドスンチ…奇妙な音がする、当たった音かも、事故怪我では。



早いもので取り組みはじめて 25年があったと思う間に過ぎました。変わりばえのしない 素人集団の発行する お粗末な冊子ですが 長年ご愛読くださる 皆様には厚くお礼を申し上げます。

ご愛読の皆様の心からの ご支援に支えられて よくもまあと  
思うほど継続してまいりました。本当に感謝申しています。今だから残しておけばと 有志が取り組んだものの どうなるかと頓挫し  
そうな 事もりましたが 皆様の無言の激励は それを食い止めて  
ここまでたどり着いたと思います。

お陰様で資料は豊富に 蓄えて途中からも 資料を頂きながら  
まだまだ続けそうですが 力不足はどうにもならぬ 現実の世界で  
物足りなさも 感じられていると 恐縮しています。最近若い人  
たちの関心も寄せられ ファイト湧かせながら 頑張りますので  
これからも ご支援ご協力よろしく お願い申し上げます。

No.25号も野津原の『民話、伝承』『子どもの方言世界』『里の  
味』『宝の玉手箱』『女性の底力』平成25年からはじまった  
シリーズ『宇曾山物語五助街道』『方言単語』など 方言の説明も  
入れて 進めました。『あげな話こげな話』『ちょつと一服』も  
息抜きにいれ 身近い人ではないかと 心魅かれるような話しも  
チョツピリ輝いています。

こ協力者にはすでに故人の皆さんも 久しぶりの再会場面で故郷  
の場面は 賑やかに進んで行きます。内緒話ですがこの原稿編集は  
平成24年の秋に構成したものです。ただ一部には途中で差し替  
えもあります。できるだけ忘れぬ内に 中にいれて保存の方法で  
会員すべて手づくりで 進めていますので見苦しい 読み苦しい面  
ゃ点はご了承ください。ご協力誠にありがとうございました。

伝言板  
次号は  
26号

平成も30年代に入ります。昭和から数えて93年になり 明治からは151年になります。

No.26号は2018年の4月発行予定です。

シリーズ宇曾山物語五助街道《6》。女性の底力。民話伝承。ふるさとの味。方言子どもの世界。あげな話こげな話。方言単語。宝の玉手箱。ちよつと一服。方言単語のひろがり。などが方言もチリバメて 100ページに 掲載の予定です。

調査收拾にも 多くの皆様のご協力、ご支援も。資料提供も 多くのみなさんの資料を。そんな力が取り組みに 大きな役割を果たしています。

時代は厳しい環境にあります。健康こそ幸せの原点です。どうかご愛読の皆様方も お元気に 病気、怪我、事故、火災、盗難などに遭遇しませんよう ご自愛なさってください。今回もご愛読を誠にありがとうございました。厚くお礼申し上げ 次号のご案内といたします。



平成29年10月吉日

大分市野津原 野津原方言調査会 会員一同

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1